松本市文化財調査報告No.51

松本市高畑遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1987. 3

松本市教育委員会

松本市高畑遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1987. 3

松本市教育委員会

第 3 号住居址 出土 48

土器棺 2

序

芳川地区は、東山道の覚志の駅があったところといわれ、古代より重要な場所であり、研究者の関心を集めておりました。しかし考古学的な調査を行なったことがなく、不明確のまま現在にいたっております。ところがこの度、牛伏川左岸の芳川村井町地籍に厚生年金健康福祉センターが建設されることとなったため、文化財保護の立場から記録保存を目的とする緊急発掘調査が実施されました。発掘調査は市の教育委員会が担当し７月１日から７月28日までの約１ヶ月間行なわれ、この間地元のみなさまの御協力をいただきまして無事終了することができました。

この調査の結果については本文で詳述してありますように、古墳時代から平安時代までの竪穴住居址と、縄文時代の墓址が発見されました。特に古墳時代の住居跡からは近畿地方から運ばれてきたと思われるような土器もあり、覚志の駅があったといわれるのもうなずける気がいたします。この調査結果が今後同地区の歴史解明の一端となり、また、文化財のたいせつさ、保護の必要性などを御理解いただければ、幸甚に存じます。

最後に調査にあたりまして多大な御理解と御協力をいただき、全面的に御援助くださいました芳川公民館、芳川出張所をはじめとする関係機関及び地元の皆様に衷心より謝意を表して序といたします。

昭和62年３月

松本市教育委員会

教育長　　中　島　俊　彦

例　言

1．本書は昭和61年７月１日から７月28日にわたって実施した松本市芳川地区に所在する高畑遺跡緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は長野厚生年金健康福祉センター建設に伴う緊急発掘調査で、調査は松本市教育委員会が行ったものである。

3．本書の執筆は、第１章事務局、第２章第１節太田守夫、第３章第３節１直井雅尚、４松本建速、第４章「おわりに」神沢昌二郎が担当し、その他は熊谷康治が行なった。

4．本書の編集は、事務局が行ない滝沢智恵子の助力を得た。

5．本書内の遺構断面図に用いた基準の高さ（標高）は618mで統一した。

6．本書作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。

土器の復元	滝沢智恵子、五十嵐周子、土橋久子
土器の実測、トレース	土橋久子、熊谷康治
石器の実測、トレース	関沢聡、松本建速、赤羽包子
鉄器の実測、トレース	熊谷康治
遺跡図整理、トレース	開嶋八重子、熊谷康治
遺物写真	岩渕世紀、大村敏博、岩野公子

7．出土遺物については、信州大学教授大参義一氏にご教示いただいた。記して謝意を表わす。

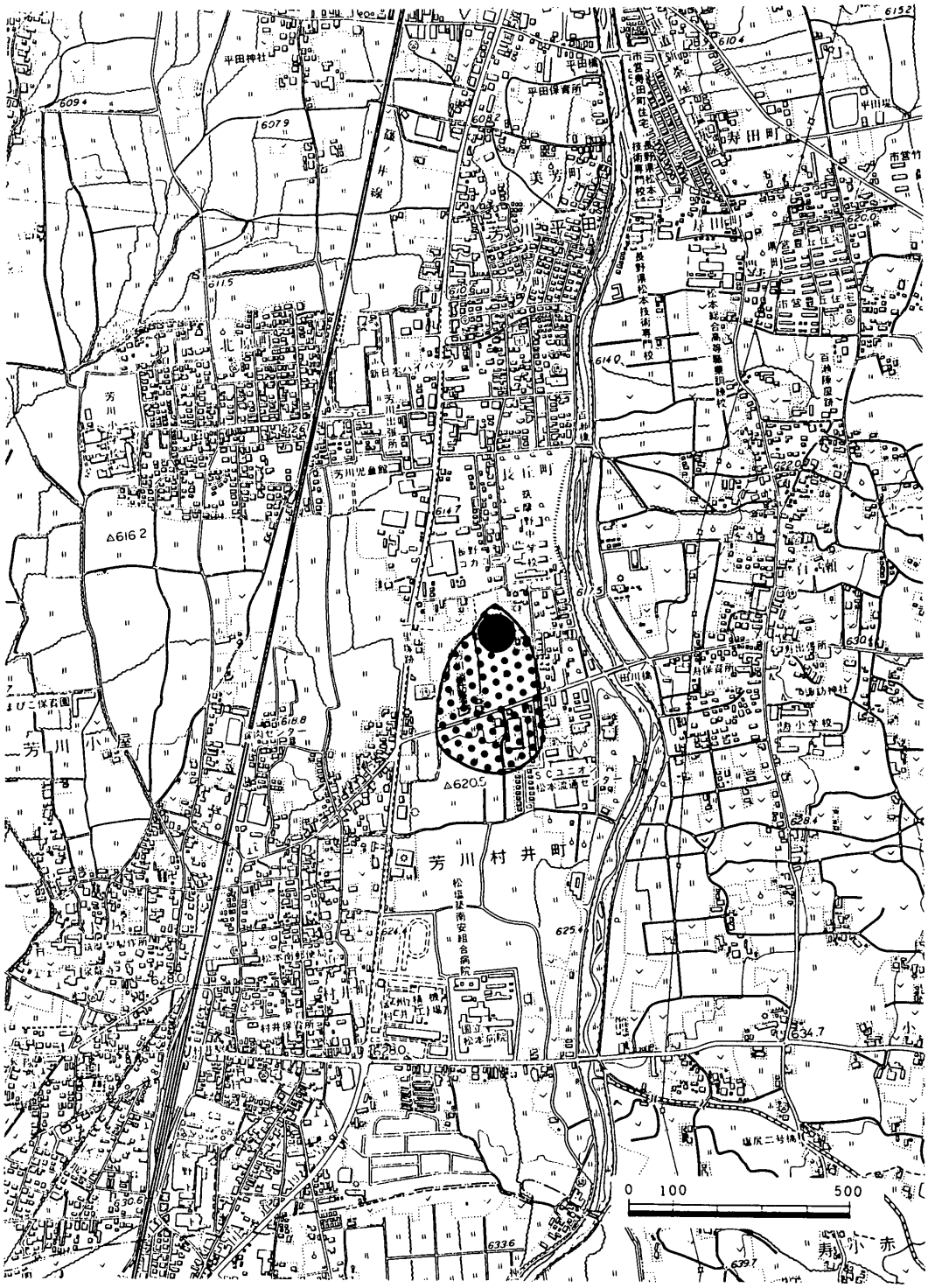
8．出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

目　　次

第１章　調査経過
　第１節　調査に至る経過……3
　第２節　調査体制……3
　第３節　調査日誌……4
第２章　遺跡の環境
　第１節　遺跡の立地と地理的環境……5
　第２節　周辺遺跡……9
第３章　調査結果
　第１節　調査の概要……13
　第２節　遺構……14
　第３節　遺物……33
第４章　調査のまとめ……51

挿図目次

第１図　遺跡分布図と調査位置……2
第２図　地層断面図……7
第３図　調査範囲図……8
第４図　周辺遺跡……10
第５図　調査地区全体図……11
第６図　第１号住居址(1)……15
第７図　第１号住居址(2)……16
第８図　第２号住居址……17
第９図　第３号住居址(1)……19
第10図　第３号住居址(2)……20
第11図　第３号住居址(3)……21
第12図　土器棺墓(1)……22
第13図　土器棺墓(2)……23
第14図　土壙・ピット(1)……24
第15図　土壙・ピット(2)……25
第16図　土壙・ピット(3)……26
第17図　土壙(1)……27
第18図　土壙(2)……28
第19図　土壙(3)……29
第20図　第１号住居址出土土器……41
第21図　第２号住居址出土土器……42
第22図　第３号住居址出土土器……43
第23図　土壙・ピット・検出面出土土器…44
第24図　土器棺墓１・２……45
第25図　縄文土器……46
第26図　縄文土器・鉄製品……47
第27図　石器(1)……48
第28図　石器(2)……49
第29図　石器(3)……50



第１図　遺跡分布図と調査位置

第1章　調　査　経　過

第1節　調査に至る経過

この調査は、当地に長野厚生年金健康センターを建設することとなったことに伴う、文化財保護のため記録保存を目的とする緊急発掘調査である。

建設予定地から土器が出土すると地元より報告があったため、教育委員会が試掘調査を実施した。この結果、竪穴住居址1軒及びピット等が確認されたため、今回の本調査となったものである。

第2節　調　査　体　制

松本市教育委員会が直営で実施することとなり、次のとおり調査団を結成した。

調査団長	中島俊彦（松本市教育委員会教育長）
調査担当者	神沢昌二郎（松本市立考古博物館館長）
調査員	太田守夫　（地質）
	三村　肇　（考古）
	竹原　学　（考古）
	三村竜一　（考古）
調査補助員	土橋久子
作業協力者	青木雅志、赤羽喜平、相澤律子、伊藤芳子、大出六郎、奥原富蔵、開嶋八重子、古本喜佐子、小林幸江、小林雅子、佐々木謙司、菅原正次、都々地尾伝、瀬川長広、鶴川登、土屋君子、中村喜代子、中島新嗣、原田美春、備前重秋、藤井尚子、松山登代子、丸山愛徳、丸山　誠、宮島貴美子、村山照子、村山正人、横山倍七、渡辺博忠、渡辺一子
事務局	浜憲幸（社会教育課長）岩渕世紀（文化係長）熊谷康治（主事）

第3節　調　査　日　誌

昭和61年7月1日　(火)　曇のち雨　発掘開始。重機による排土作業。

7月2日	(水)	曇のち雨	重機による排土作業継続。	
7月3日	(木)	晴	資材の搬入、テントの設営。重機による排土作業継続。	作業員：4名
7月4日	(金)	晴	検出作業。	作業員：29名
7月5日	(土)	曇	検出作業継続。東側へ検出面拡張。	作業員：28名
7月7日	(月)	曇	検出作業継続。1・2住掘り下げ開始。	作業員：27名
7月8日	(火)	曇	トレンチ3本入れる。基本杭打ち込み。	作業員：30名
7月9日	(水)	雨	雨の為発掘作業中止。土器洗い。	作業員：1名
7月10日	(木)	曇	東側地区及び砂利層内の再検出。1・2住掘り下げ継続。	作業員：19名
7月11日	(金)	曇	ピット・土壙の半割。1住土層図作成。	作業員：29名
7月12日	(土)	晴	土壙・2住土層図作成。ピット・土壙半割継続。	作業員：24名
7月14日	(月)	晴	ピット・土壙土層図作成。3住検出。	作業員：28名
7月15日	(火)	雨	雨の為発掘作業中止。土器洗い。	作業員：1名
7月16日	(水)	雨のち曇	雨の為発掘作業中止。図面整理。	作業員：2名
7月17日	(木)	曇	3住掘り下げ開始。土層図作成。	作業員：22名
7月18日	(金)	晴	ピット・土壙掘り下げ。	作業員：8名
7月19日	(土)	晴	3住平面図作成、遺物取り上げ。ピット平面図作成。	作業員：23名
7月21日	(月)	曇	ピット・土壙平面図作成継続。	作業員：25名
7月22日	(火)	雨のち曇	雨の為発掘作業中止。図面整理。	作業員：2名
7月23日	(水)	晴	1・3住カマド平面図作成、写真撮影。	作業員：23名
7月24日	(木)	晴	ピット・土壙掘り上げ全体写真撮影。	作業員：7名
7月25日	(金)	晴	3住内ピット平面図作成、遺物取り上げ。	作業員：7名
7月26日	(土)	晴	遺構全体図作成。	作業員：5名
7月28日	(月)	晴	遺物・図・用具等整理。現場撤去・運搬作業終了。	作業員：4名

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡の立地と地理的環境

1．位置と地形

本遺跡は松本市芳川村井町高畑地籍の国道19号線より東へ約130m、市芳川消防署のほぼ北に位置している。標高616m前後、平均傾斜10／1000の平坦面上に広がっている。遺跡の東を流れる田川の現河床からわずか150mの距離にあり、たびたび氾濫の被害を受けている。このことは次の項でくわしく述べるが、遺跡内の旧流路の方向がすべて現河床までの距離150m～250m以内に入っている。田川左岸の発掘は今日まで極めて少ないが、中央道建設に伴う遺跡調査の吉田川西遺跡、松本市調査の出川南遺跡の自然環境に最も近い。

現在田川は両岸を数mの堤防によって護岸されているが、かつては土手程度の堤防で水量も乏しく多量の降雨のない限り小流に過ぎなかった。この付近の河床面と両岸の面との比高は零に等しく、当時の地形にも表現されている。現在は護岸を除けば天井川となっている。

2．遺跡の堆積層

高畑地籍は近年（昭和30年以降）地下揚水灌漑によって水田化された所で、それまでは石の多い畑地であった。水田化されてからも、利用期以外の耕土は畑地と間違えるほどの石混りの土壌である。利用期に水を張り代かきすることによって、石が底に沈み稲の植付けとなっている。高畑は一名固畑と呼ばれ、土壌は雨が降るとやわらかになるが、乾くと板か瓦のように堅くなり、割れると塊状となった。そのため鍬や鋤耕に抵抗となったり、乾燥して不作となった。

高畑の地名も周辺より高くやせ地という意味で、実際に高畑と現河床の間には、田川橋から北へ連続する凹地（旧河床）があって、微地形的に一段上っている。

これらの状況を、発掘地の代表的な断層断面からみると、第2図のようになっている。

断面図（第2図）中（1）は古田と呼ばれ、田川や奈良井川からの引水（一本松せぎ）で早くから開田された水田域である。（2）～（7）は近年の開田で、地下揚水による灌漑田である。水利の関係もあるが、早く開田された（1）は土層も厚く、耕土中にも礫は認められない。一本松せぎを境として一段高くなっている。これに対し（2）～（7）は耕土が極めて薄く、現在でも耕土に礫をもっていることは前に述べた。

（2）～（7）に共通する状態をあげると次の通りである。

(1)　耕土が極めて薄いこと

(2)　耕土下に10～20mの細礫層をもち、耕土との間に鉄、マンガンの集積や盤層をみる。

(3)　細礫層の下に30～50cmの砂質の褐色土層がある。この土層には細礫が混ることがあるが、乾く

と堅くなったり、塊状となる。粗さんである。

(4) 褐色土層の下はいずれも礫層や礫混り上層であって、表土からここまでの礫は土や鉄・マンガンが付着し汚れが目立つ。

(5) たびたびの田川の氾濫を受けていて砂礫質である。

(6) （1）を含め田川の氾濫による亜円礫・円礫を堆積している。

砂岩（硬質）と砂岩のホルンフェルス、礫岩（粘板岩の角礫を含む）と礫岩のホルンフェルス、安山岩、ヒン岩、チャート、けつ岩、石英閃緑岩など、礫の大きさは10×7cm以下、多数は4cm以下の細礫。

次に発掘地を平面的にみると、東部トレンチにはおよそN－40°－W、流れを示す礫層が表(耕土)の下に4本発見された。この中でも中央のものは、(6)に示したように幅4m、厚さ1.5mを越える砂礫層で、相当の期間流れとなっていたものと考えられる。これらの砂礫層の筋は、東側のわずかな距離にある旧河床に連続するもので、堆積状態からみて表土から第一、第二、第三層に分けられる。第一礫層は厚さ20cm前後で、東側・西側調査地区とも共通している。第二礫層は褐色土層と同時堆積と考えられる。細・小礫層や砂、粘土混りの土層である。第三礫層は85cm以下にあらわれる大礫を含む礫層である。4本の礫層間には土層が挟まれているが、広さ深さとも大きくない。

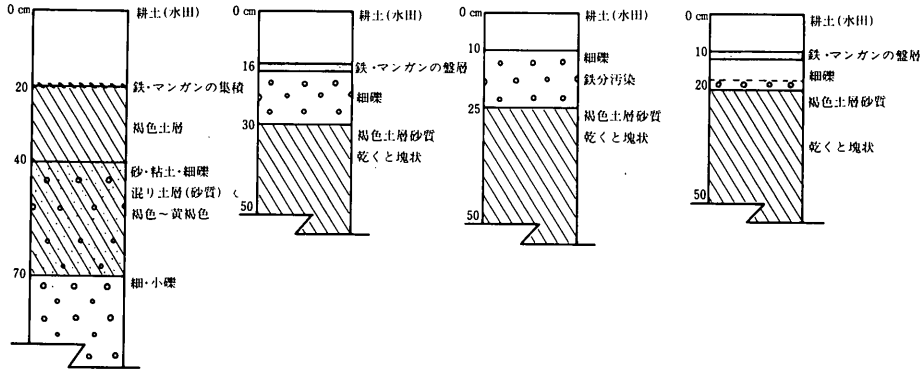
第一礫層の後にも、しばしば氾濫の冠水はあったものと思われ、表土に多数の細・小礫が散乱している。西方の古田は第二礫層後は冠水を受けていないようである。また牛伏川の影響は石英閃緑岩が極めて少なく、この地層における限りは見当らない。

地下水位は極めて低く、周辺の松本平農協（－）20.9m、コカコーラ（－）23.0m、ユニオン流通センター（－） 25.85mである。

3．遺跡の立地

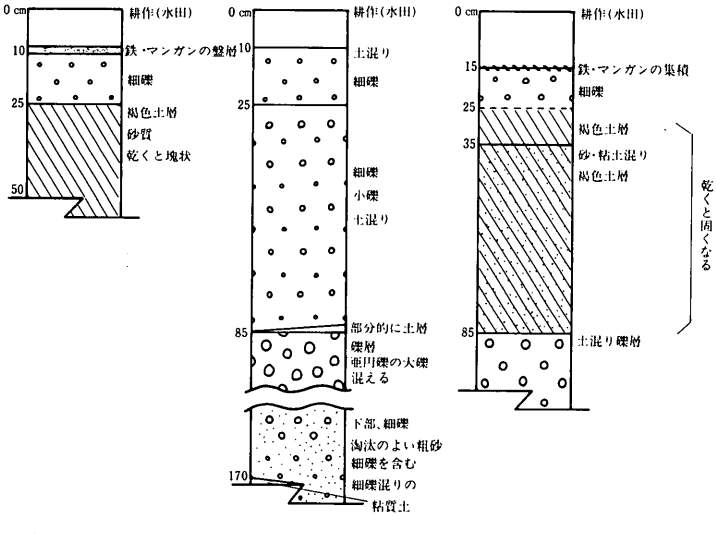
東側調査地区内の遺構・遺物の状況は北東隅に古墳時代、中央に奈良時代、南寄りに平安時代、北西寄りに縄文晩期（甕）の発見や出土が報告されている。これを前記の堆積層と対比してみると、古墳時代、奈良時代のものは第二礫層を切って存在し、平安時代のものは第二礫層と同時堆積の土層に存在している。縄文晩期のものは上層と第二礫層双方にわたって存在し、出土物は礫層に埋められているようにもみられた。これから堆積層の形成と遺構の関係を考察すると、まず第三礫層の堆積後に縄文晩期の生活が始められ、第二礫層で被覆された(甕が埋められたものとしてみて)。次に第二礫層及び同時異相の土層の堆積後に古墳期・奈良・平安期の生活が行なわれ、その後薄い第一礫層や表土に覆われたものと考えられる。したがって遺物の表面採集が難しかったものと思われる。

縄文晩期の遺物の出土状況については、極めて部分的のようにも考えられ、西または北西方へ発掘地を拡大すれば遺構の発見がみられるかもしれない。またこの遺物（甕）にかかっている礫層も北西隅で表面では切れているが、その連続が確認できそうである。



(1)調査地区外西側　(2)北側　(3)中央　(4)南側

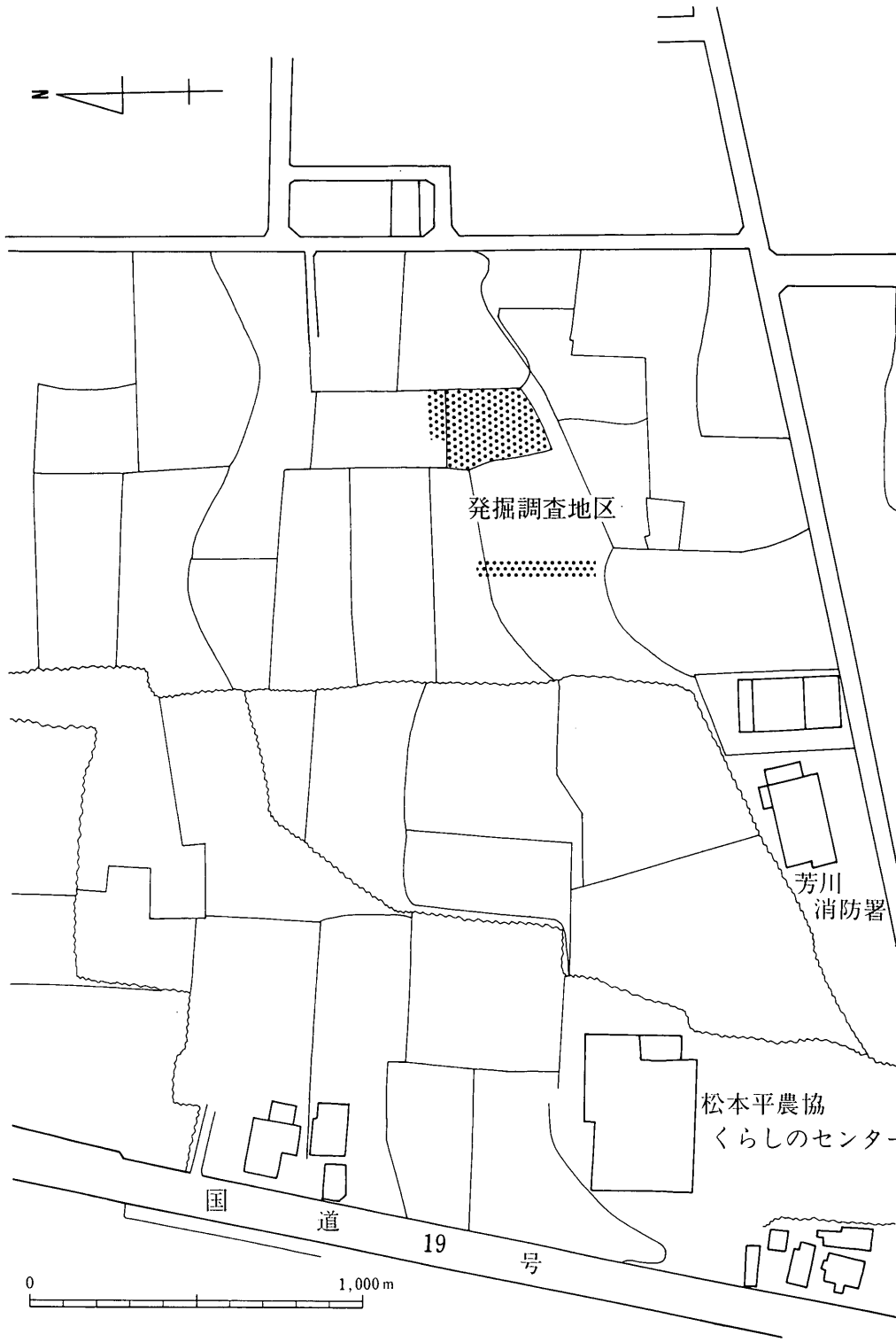
トレンチ1



(5)南側　(6)中央　(7)北側

トレンチ2

第2図　地層断面図



第3図　調査範囲図

第2節　周　辺　遺　跡

高畑遺跡の所在する芳川地区は、松本市の南に位置し塩尻市と境を接する。現在の集落は西側を流れる奈良井川が形成した段丘上にあり、東側の田川付近まで広がっている。この段丘は隣接する塩尻市側から延びてきて、芳川地区付近からはっきりしなくなり集落北側の水田地帯で消滅する。遺跡もこの段丘上に分布している。

本項では、芳川地区を中心にその周辺地域について遺跡分布の概要を記述したい。

西側の段丘直上にある小屋の集落と重なるように、小屋遺跡がある。縄文土器の出土が確認されており、また平安時代の須恵器土師器も出土している。この遺跡は段丘上に沿って北側の水田地帯に広がっているものと思われる。現在の芳川小学校の南側水田地帯には、小原遺跡があり、平安時代の須恵器、土師器が出土している。また、小原遺跡から東側の国鉄篠ノ井線付近に以前寺があったことも伝えられており、この寺に関係するものであろうか現在も石造物が残っている。小屋集落の北側、平田、野溝の集落内に、２つの遺跡が確認されている。本郷遺跡は、平田集落から、南側水田地帯に広がっており、平安時代の遺物が、出土している。野溝遺跡は、東原・五輪の２ヶ所から、遺物の出土が確認されており、平安時代の須恵器、土師器、古墳時代の土師器等が出土している。芳川地区も田川左岸へうつると、遺跡数が、少なくなる。今回、調査された、高畑遺跡を含めて、２遺跡である。南側が村井遺跡、その北側が、高畑遺跡である。村井遺跡は、セイコーエプソン村井事業所や国立松本病院周辺より、北側の水田地帯へ広がっている。確認されている遺物は、水道工事中に出土した、奈良～平安時代にかけての須恵器、土師器等がある。高畑遺跡は、今回の調査で、その範囲が南側へも広がることが予想されるが、それは、村井遺跡との空白部分はどちらかの遺跡に入るものであろう。高畑遺跡から北側は、現在のところ遺跡の存在は、知られていない。

次に南の、塩尻側には、向井、川西、若宮などの遺跡が存在する。吉田向井遺跡は、昭和57年に発掘調査され、平安時代の大集落が確認されており、吉田川西遺跡は、中央道長野線建設に伴い発掘調査され、奈良～平安時代にかけての大集落、中世以降の集落が確認され、また、土壙内から緑釉陶器など多数の遺物が出土したことで知られている。田川右岸の寿地区へ入ると、段丘上に百瀬遺跡があり、弥生時代の百瀬式土器の標式遺跡として知られている。田川に沿って北側へ行くと、向原、竹渕、南原遺跡がある。竹渕、南原遺跡は、昭和60年に発掘調査が実施され、中世以降の礎石及び、礎板をもつ柱穴群、竪穴住居址が確認されている。田川の左岸に戻り、出川地区に入ると遺跡の数も多くなり、遺物の出土量も多くなるが、この内一番南側に位置する遺跡は、出川南遺跡である。本年度に発掘調査を実施し、弥生～平安時代の住居址が５軒確認され遺物も多数出土した。

第４図　周辺遺跡

第5図　調査地区全体図

第3章　調　査　結　果

第1節　調査の概要

1．調査地区の設定

高畑遺跡は松本市芳川村井町に所在し、塩嶺峠より発する田川の左岸に位置する。当遺跡は遺跡地図に記載されていない新発見の遺跡であるため、本調査に先立って試掘調査を行なった。この結果、竪穴住居址1軒及びピットなどとともに、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器などの出土が確認された。このため本調査では、これらの出土地点を中心に調査地区を選定し、約 950m²のⅠ地区と、西側へ約40mの地点に約90m²のⅡ地区を設定した。まず試掘調査で確認された遺構の検出面まで重機により排土を行ない、以下遺構検出作業を実施した。また平行して調査地区のほぼ中央部に設定した基準点から、3m間隔で南北と東西方向に振出し調査地域内を3m方眼でおおった。基準点を南北に通るものについて0軸とし、東側を1～4軸、西側を－1～－6軸とした。東西に通るものについては北辺からA軸、南辺のO軸までとした。直交する点は1－A、または、－1－Aのように呼称し基準点は0－Gとした。基準点0－Gから西側へ40.5mの地点にⅡ地区の基準点を設定した、0軸方向は磁北を示している。

2．調査結果の概要

当遺跡は田川の左岸に位置し、地形的には田川の影響を強く受けている。現況は水田であるがかつては桑畑であり、南から北への緩い傾斜面であったが、開田時切り盛りして一枚の水田とした。このため一般的に、南側は耕作土下直ぐに検出面となり、深さは約30cmである。北側はやや深く40～50cmである。検出面は茶褐色土及び暗茶褐色土で、粘土分と砂質分を含んでいてザラザラしており乾くと非常に堅い。遺構内の覆土は黒色土及び黒褐色土であるものが多く、また、黄褐色土を含むものがある。

検出された遺構は竪穴住居址、土壙、ピット、土器棺墓である。この内竪穴住居址は第1号から第3号住居址の3軒で、それぞれにかなりの時期差が認められる。土壙及びPitはおおむね大きさが50～60cm以上のものを土壙とし、それ以下をPitとした。土壙は30基、Pitは101基確認された。時期が確定できるものはなかった。土器棺墓は1基で縄文晩期の土器が2個体出土した。

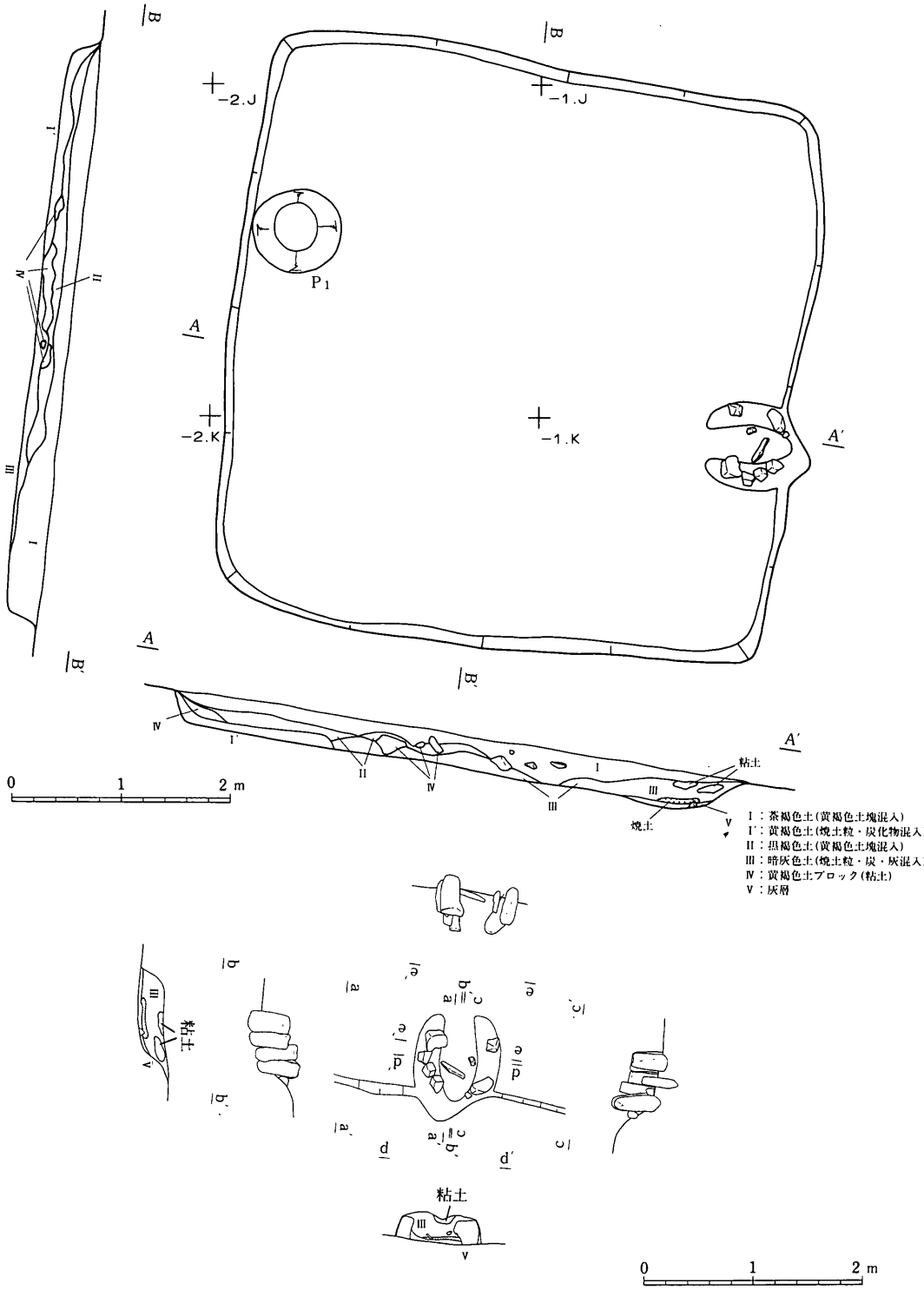
出土したおもな遺物は、1住から灰釉陶器碗、段皿、3住から出土した土師器甕は他地域より搬入されたと思われる土器であり注目される。土壙及びPitからは、縄文土器、土師器の小破片が出土したのみであった。

第2節　遺　　構

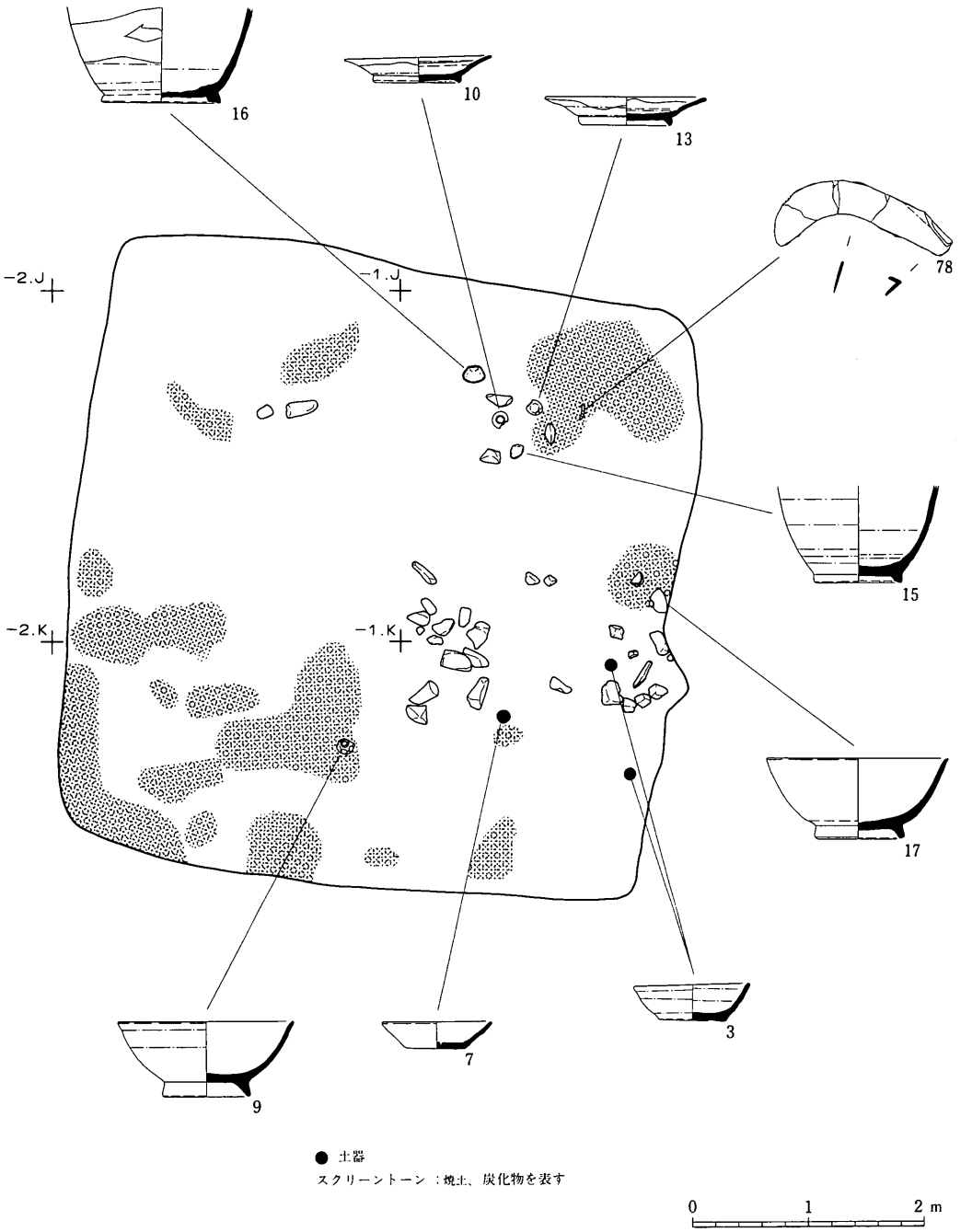
1．第1号住居址（第6・7図）

本址は調査地区の中央部南側に位置し、事前の試掘調査時に本址北壁部分に試掘坑があたったため、北壁、東壁の上面プランが確認されたものである。本址周辺は開田前の地形では、高い部分にあたるため、開田にあたり土が削り取られたので検出面までは浅く、耕作土を除くと本址が検出された。深さは25～30cm前後である。住居址の平面形状は方形を呈し、カマド部分が壁外へ張り出す。東壁はカマドを間にして両側より弧を描く。北側の方がやや強い。規模は南北4.8m、東西5m、壁の残存高は30～35cmを測る。面積は24m²である。主軸方向はS－88°－Eを示す。覆土は基本的にはⅠ層からⅢ層に分割される。全体に粘土質の黄褐色土が小塊で混入するが大きな塊はⅣ層とした。Ⅰ層は茶褐色土、Ⅱ層は黒褐色土、Ⅲ層は暗灰色土でⅠ′及びⅢ層に焼土粒及び炭化物が含まれている。床面は黄褐色粘質土で堅い。柱穴は確認されず、西壁側北寄にP_1があったのみである。径80cmを測る円形で深さは10cm前後である。カマドは東壁中央やや南寄に構築され、石組に粘土を使用したものである。煙道は確認されなかった。袖石は20～30cm大の亜角礫でチャート、安山岩、花崗岩、硬砂岩等が使用されている。田川水系及び奈良井川水系の石である。粘土は黄褐色粘土でやや砂質分が多い。袖部は長さ96cm、巾30cm前後、内部巾は25～32cmである。火床面はわずかに窪み灰及び焼土の層となっている。長さは80cm、巾60cm前後を測る。支柱石は2本有り1本は燃焼部中央左寄に、他はその右側に横倒していた。同一の石を割って使用したものである。床面及び内部の状態は中央部カマド寄に10～30cm大の石が集石状に見られた。石は床面より10～15cm程高く覆土中層から下層上部にかけて径1m程の範囲におよび、一部はⅢ層内に入るが大部分はⅠ層内で確認された。床面上にはほぼ一面に炭化物及び暗灰色土（灰層）でおおわれており、特に南側、北東隅が多い。炭化物は細小で、炭化材は確認されなかった。暗灰色土の厚さは2～5cmぐらいである。

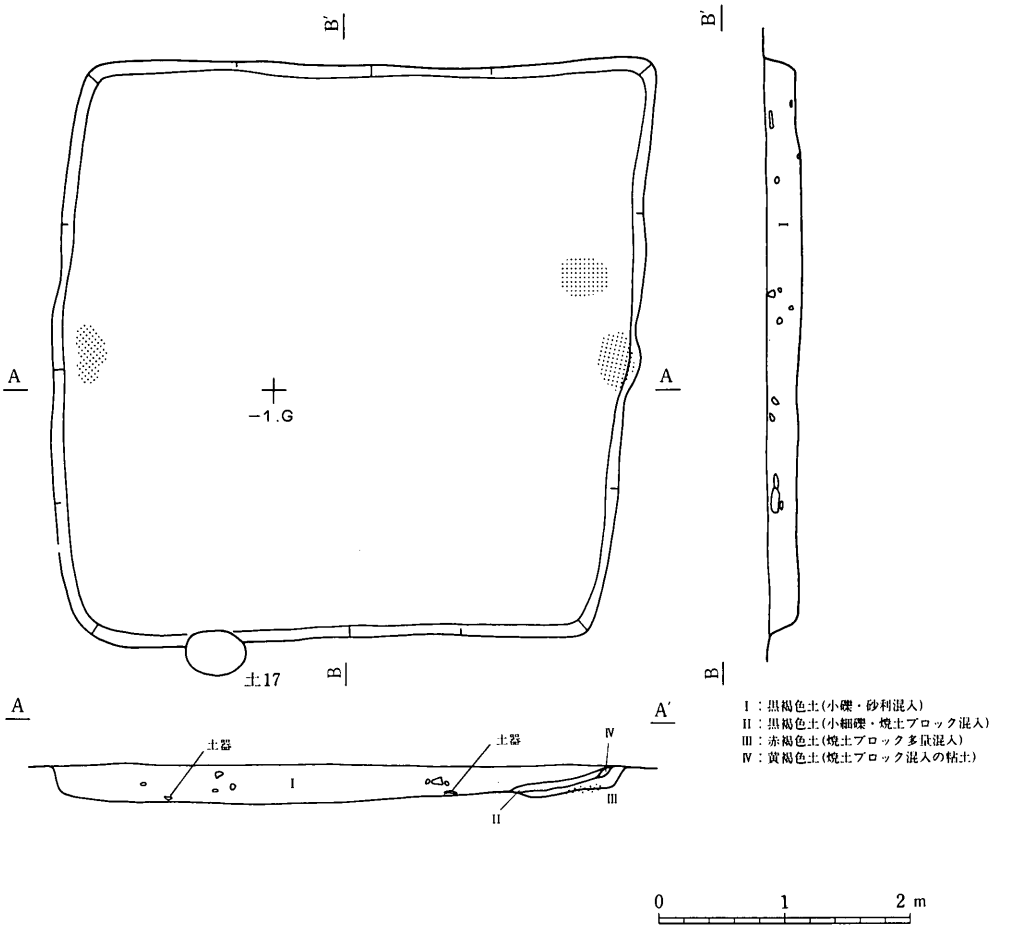
遺物については灰釉陶器碗、段皿、瓶・土師器坏、埦、鉄製品では鎌等がある。須恵器の出土は少なく図示しえるものはない。灰釉陶器碗の内17はカマド北側の東壁に逆位の状態で出土した。内側には赤色の付着物がある。10、13は灰釉陶器段皿で北東隅寄の床面上にあり周辺には15、16の灰釉陶器瓶底部、鉄製品の鎌も出土した。遺物の出土量は全体で2301gあり、この内縄文土器片110g、土師器1099g、須恵器170g、灰釉陶器922gである。


B
B
-2.J
-1.J
P1
A
-2.K
-1.K
A'
B'
A
B'
A'
粘土
焼土
0
1
2 m
I：茶褐色土(黄褐色土塊混入)
I'：黄褐色土(焼土粒・炭化物混入)
II：黒褐色土(黄褐色土塊混入)
III：暗灰色土(焼土粒・炭・灰混入)
IV：黄褐色土ブロック(粘土)
V：灰層
粘土
0
1
2 m

第6図　第1号住居址(1)



第７図　第１号住居址(2)



第8図　第2号住居址

2．第2号住居址（第8図）

本址は調査地区のほぼ中央に位置し、第1号住居址の北側6m離れる。中央部北側寄りを南東から北西方向にかけて横ぎる流路を切り込んで構築されている。また土壙17に切られる。検出面までの深さは35cm前後で第1号住居址よりやや深い。平面形状は方形を呈し、北東角がややゆがむ。規模は南北4.6m、東西4mで南北にやや長い。壁の残存高は30cm前後でまた面積は18.4m²を測る。主軸方向はS−87°−Eを示す。覆土は黒褐色土で小礫及び砂利を多量に混入する。床面は下層の砂礫層上面で大半は軟弱であるが、北東側の一部にやや堅い面が見られた。柱穴及びその他のピットも確認されなかった。カマドは東壁中央に構築されたものと思われるが、床面上及び東壁上にわずか焼土が確認されたのみである。またこの部分の壁がわずかに外へ張出していて、検出面上にも焼土がわずか確認された。他に西壁中央やや南側寄の壁際にも焼土及び炭化物が確認された。

遺物は須恵器坏、坏蓋、壺、甕、横瓶、土師器坏、甕、小形甕があるが全て破片である。住居址内より出土した遺物量は全体で3,947gあり、この内縄文土器片が260g、土師器が2,334g、須恵器が1,353gである

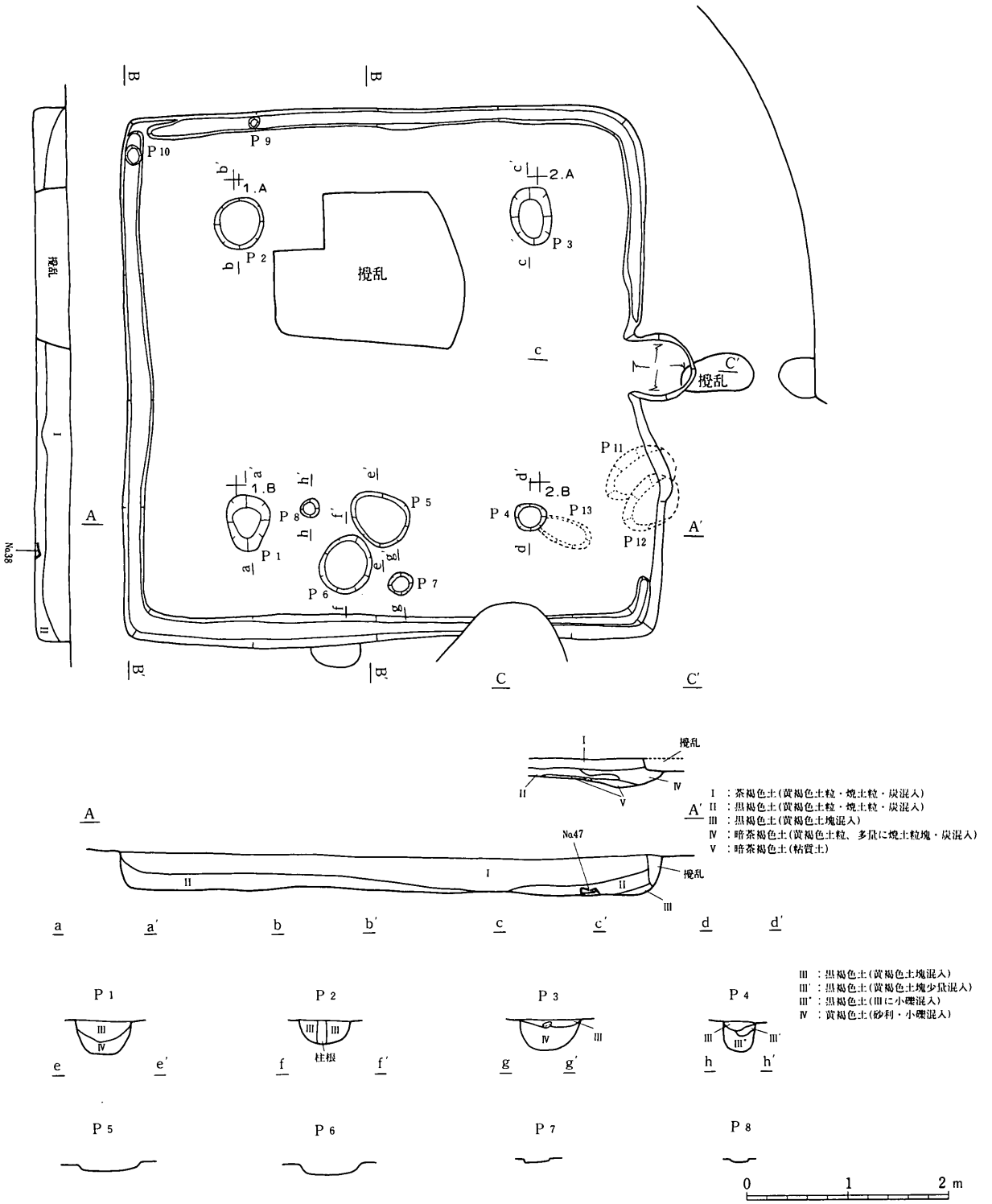
3．第3号住居址（第9～11図）

本址は調査地区の北東端に位置する。当初南側の2/3だけ確認されたのであらためて北側を排土作業をして再検出により全容を確認した。この北側部分には水田耕作用の作業小屋が建っていたため撹乱が住居址の床面下まで入っていた。この作業小屋建設時に土器の出土を見ており今回の調査の遠因ともなっている。南側を土壙21に切られまたP_{15}を切っている。検出面までの深さは南側が40cm前後で、北側は別の水田となり深さは30cm前後である。平面形状はほぼ正方形を呈し、規模は南北及び東西とも125.1mを測り面積は26.01m²となる。壁の残存高は55cm前後を測り、確認された住居址中一番広く一番深い。主軸方向はS－89°－Eを示す。覆土はIII層に分けられる。I層は茶褐色土で黄褐色土粒が混る。II層は黒褐色土で黄褐色土粒が混る。III層は、II層に黄褐色土塊が混る。I及びII層には焼土粒及び炭化物が含まれるがIII層には含まない。床面は黄茶褐色土で堅いが一部北東側は砂利面でやや高くなる。ピットはP_1からP_{10}まで確認され、この内P_1～P_4が柱穴である。形状及び規模はP_1・P_3が楕円形で50×45cm前後、深さは30cm程を測る。P_2・P_4は円形で、P_2が径50cm、P_4が径30cmである。P_2は柱根が確認された。径10cm前後である。P_5～P_8は南壁寄の中央付近にあり浅い。$P_{5、6、7}$は焼土を含み特にP_6はブロック状に混入している。P_8は焼土を含まない。東壁北側半分から北壁と、西壁から東壁南側の一部に周溝がめぐる。巾は10～25cm、深さは5～10cm程で北壁側が浅い。北壁西側と西壁北側の周溝内にP_9、P_{10}がある。径10cmと、20×15cmで深さは15cm程を測る。カマドは東壁中央にあり燃焼部は壁外へ掘込み、長さは70cmである。煙道部は撹乱されている。火床面はやや窪み、焼土及び炭化物が多量に混入している。袖石等は確認されなかった。他には東壁南側とP_4東側の床面が貼り床されており、下にP_{11}、P_{12}、P_{13}が検出された。形状は楕円形で大きさはP_{11}が75×40cm程で深さ11cm、P_{12}は65×55cm、深さ14cm、P_{13}は55×25cm程、深さ6cmであった。

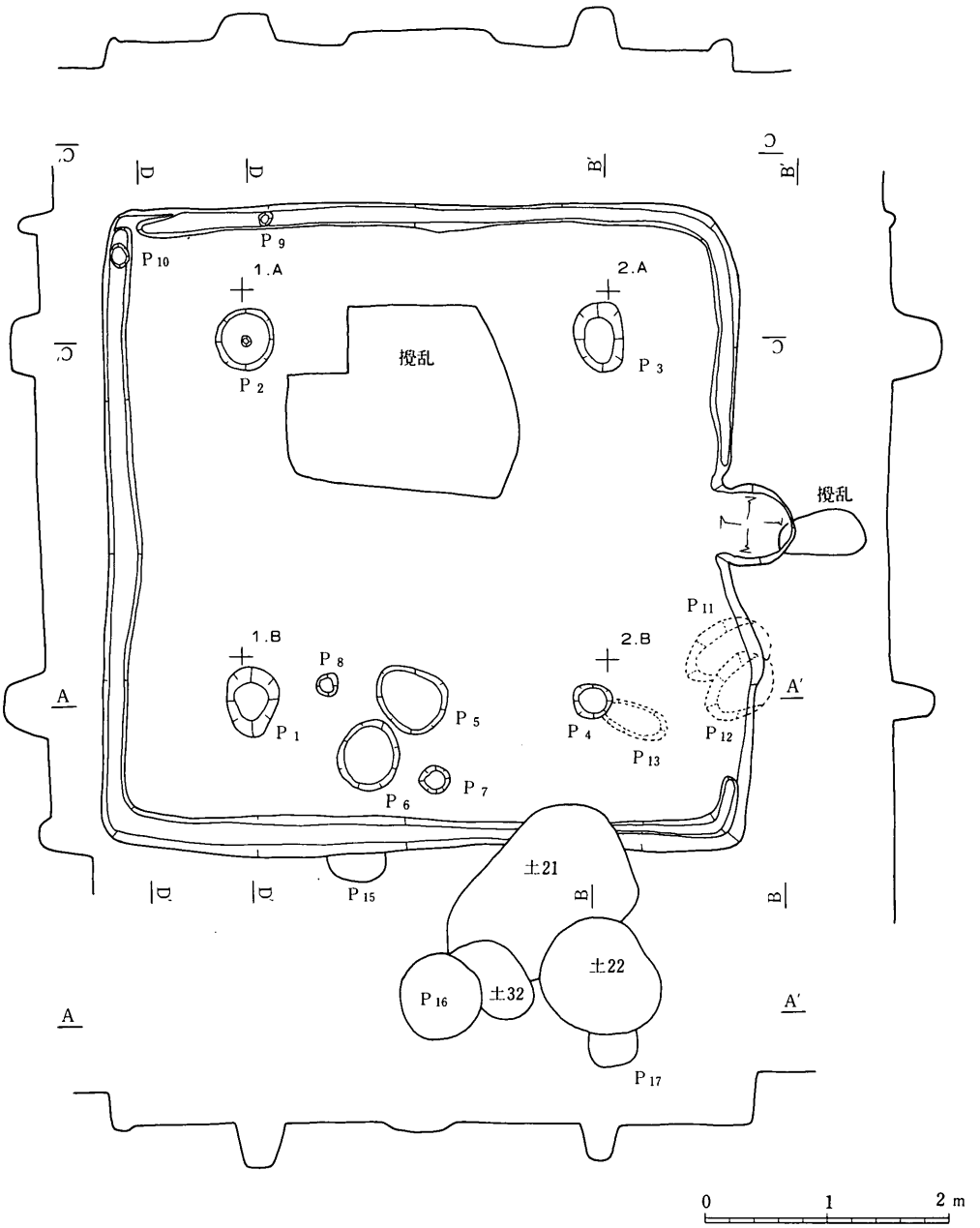
遺物は、須恵器坏、広口壺、短頸壺、土師器甕、鉢、小形甕、鉄製品では鎌、釘、石製品では砥石等がある。土師器甕の内47は、P_4東側の床面上に横倒して潰れた状態で出土し、38の鉢はP_5・P_6上面に散乱していた。また48の甕はP_{13}内より出土し、カマド周辺からは40、42、43が出土した。鉄製品の鎌は北壁側西寄の床面上から、釘は北壁側の周溝内より出土した。土器の出土量を見ると縄文土器片1,000g、土師器5,566g、須恵器159g、種別が不明なもの3,190gで合計9,915gである。

住　居　址　一　覧

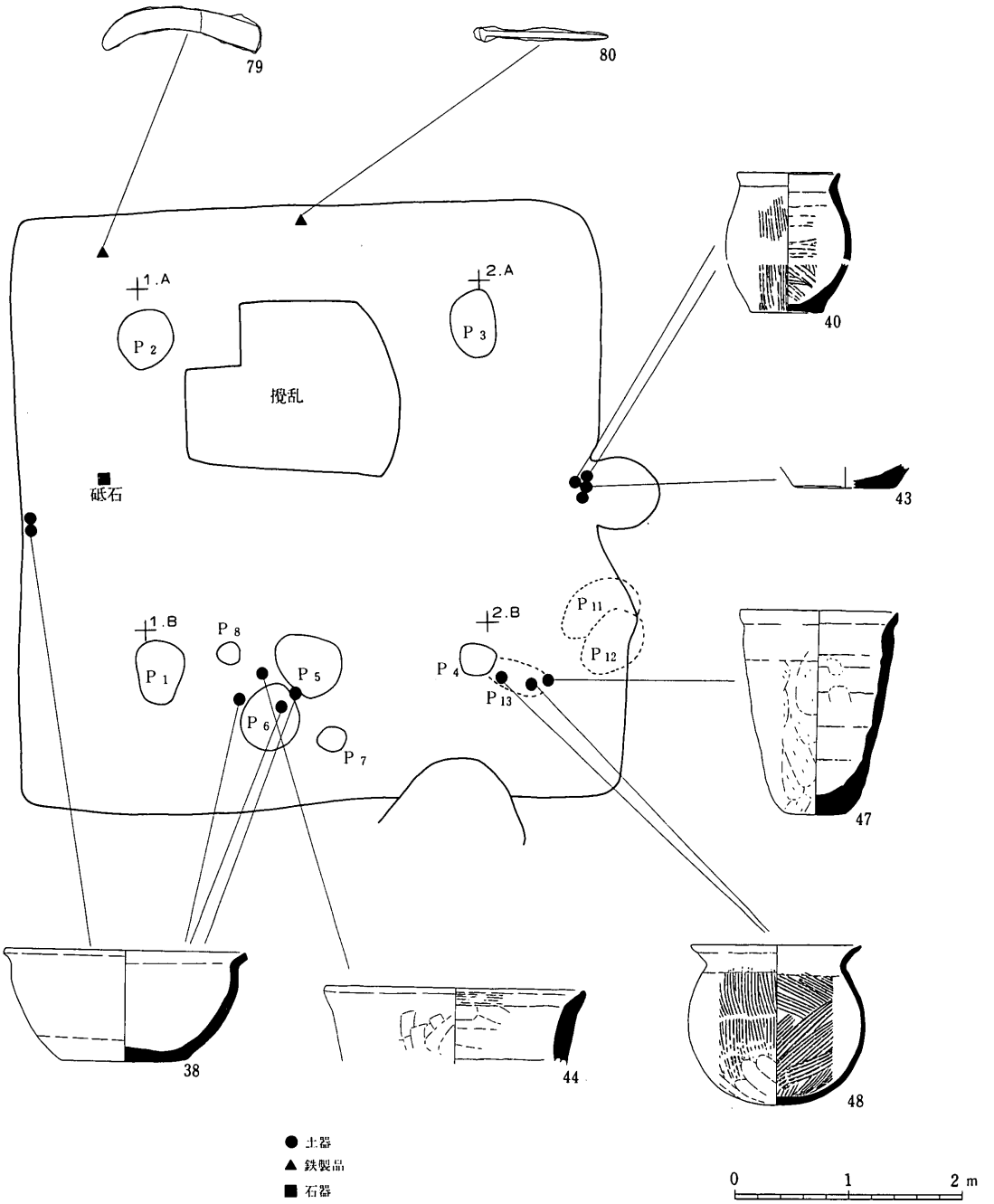
番号	位置 縦軸	位置 横軸	主軸	形状	規模 (m)	残存高 (cm)	面積 (m²)	ピット 柱穴	ピット その他	カマド 位置	カマド 状態	遺物 (数字は遺物番号)	備考
1	－2 0	I L	S88°E	方形	5 × 4.8	30	24		1	東壁 やや南寄	粘土を中心に石	1～17	平安時代 縄文 110g　土師 1,099g 須恵 170g　灰釉 922g
2	－2 0	F H	S87°E	〃	4.6 × 4	〃	18.4			東壁 中央	わずかに焼土面	18～34	奈良時代 縄文 260g　須恵 1,353g 土師 2,334g
3	0 3	A C	S89°E	〃	5.1 × 5.1	55	26.01	4	7	〃	壁外へ出る。 煙道あり	35～48 67, 68, 70, 72 74, 76, 77	古墳時代末 周溝，床下土壙あり 縄文 1,267g　須恵 159g 土師 5,566g　不明 3,190g


B
B
P 9
P 10
1.A
2.A
P 2
P 3
撹乱
c
C'
撹乱
P 11
1.B
P 8
P 5
2.B
P 4
P 13
P 12
A
A'
No.38
P 1
P 6
P 7
B'
B'
C
C'
撹乱
I
II
III
IV
V
A
A'
No.47
撹乱
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
I ：茶褐色土(黄褐色土粒・焼土粒・炭混入)
II ：黒褐色土(黄褐色土粒・焼土粒・炭混入)
III ：黒褐色土(黄褐色土塊混入)
IV ：暗茶褐色土(黄褐色土粒、多量に焼土粒塊・炭混入)
V ：暗茶褐色土(粘質土)
P 1
P 2
P 3
P 4
柱根
e
e'
f
f'
g
g'
h
h'
III ：黒褐色土(黄褐色土塊混入)
III' ：黒褐色土(黄褐色土塊少量混入)
III* ：黒褐色土(IIIに小礫混入)
IV ：黄褐色土(砂利・小礫混入)
P 5
P 6
P 7
P 8
0
1
2 m

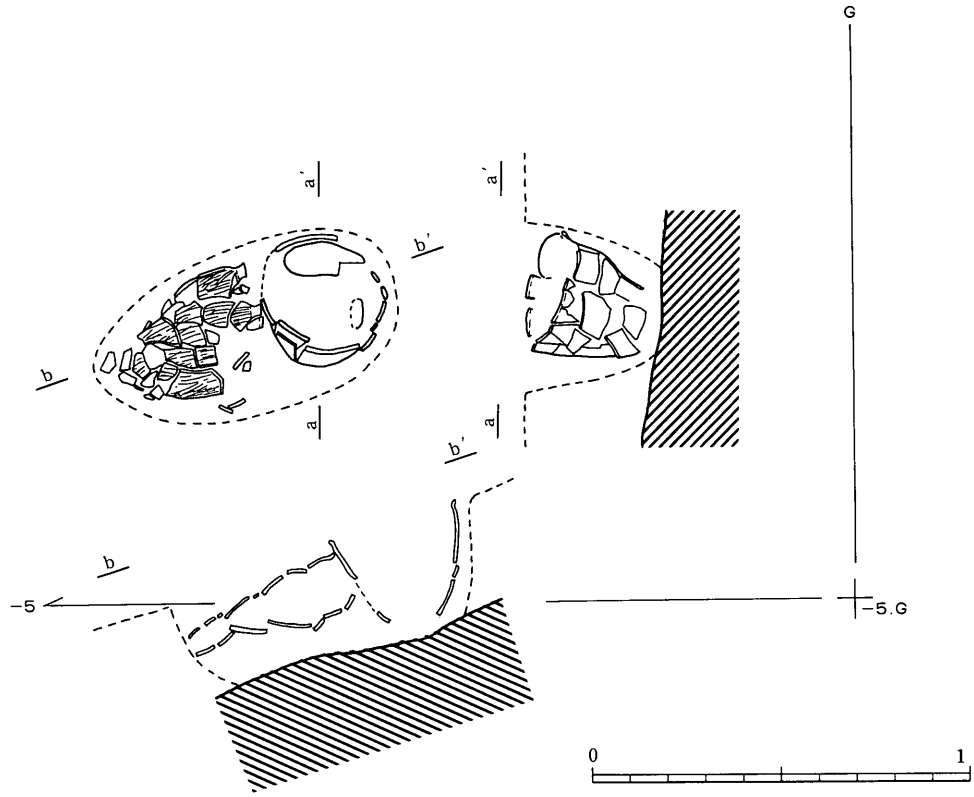
第9図　第3号住居址(1)



第10図　第３号住居址(2)



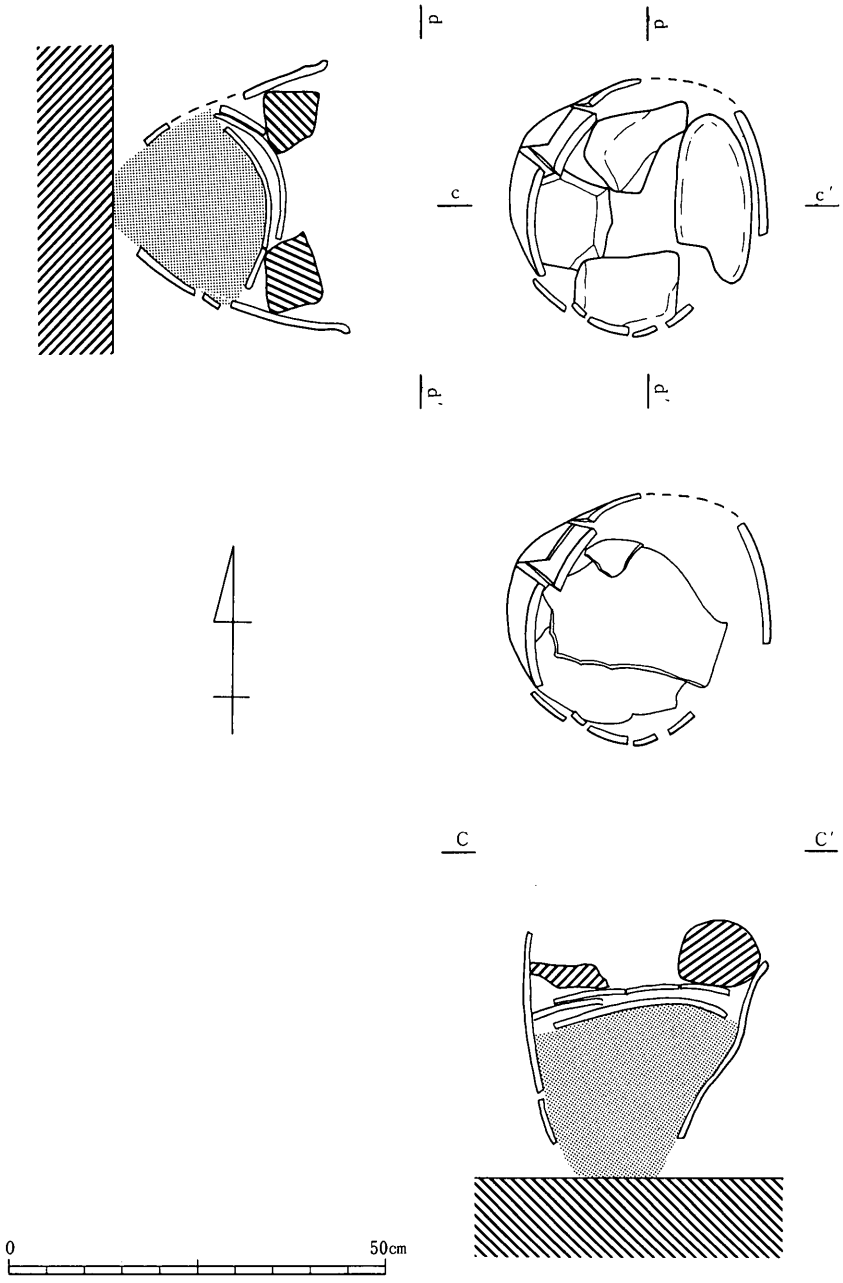
第11図　第３号住居址(3)



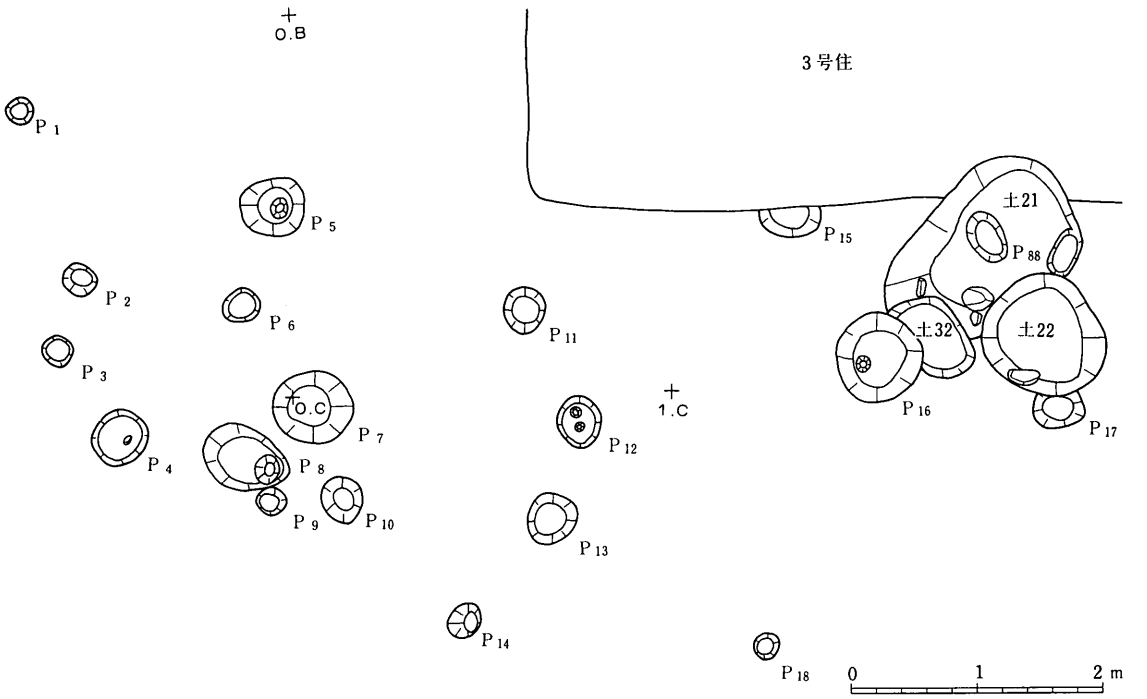
第12図　土器棺墓(1)

4．土器棺墓（第12・13図）

調査地区西側北寄に検出された。北東側に土壙23、P_{82}・P_{83}・P_{84}がある。本址は南東方向から北西方向にかけて入り込む礫層がＩ及びＪの線で下へもぐりこむ北側に位置する。検出面は暗褐色土で上面での遺物は比較的多かったが住居址、その他の遺構は確認されなかった。本址はこの検出面上に土器棺１の口縁部が出土したことから確認されたものである。この口縁部を中心に幅50cm、長さ６m前後のトレンチを設定し、掘り方を確認したが不明であった。土器棺は２個体ありほぼ完形となる。土器棺１は深鉢形土器で口縁部の一部と底部を欠く。状態は正位で埋置されていた。周辺及び上面に口縁、胴部の破片はあったが底部の破片は一片もなかった。土器内部には壺の胴部片(62)で蓋をし、さらに上部には25～45cm大の石を四方に配置した状態で埋納されていた。土器棺２は土器棺１の北側に横位で埋置されていた。土器棺１より土器自体は良好であり、接合した結果、口縁部の一部を欠く他、ほぼ完形である。土器棺１・２ともに人骨及び炭化物、焼土等は確認されなかった。



第13図　土器棺墓(2)



第14図　土壙・ピット(1)

5．土壙、ピット（第14～19図）

土壙及びピットの区別については、次のとおりとした。

①大きさが50cm以上となるものは土壙

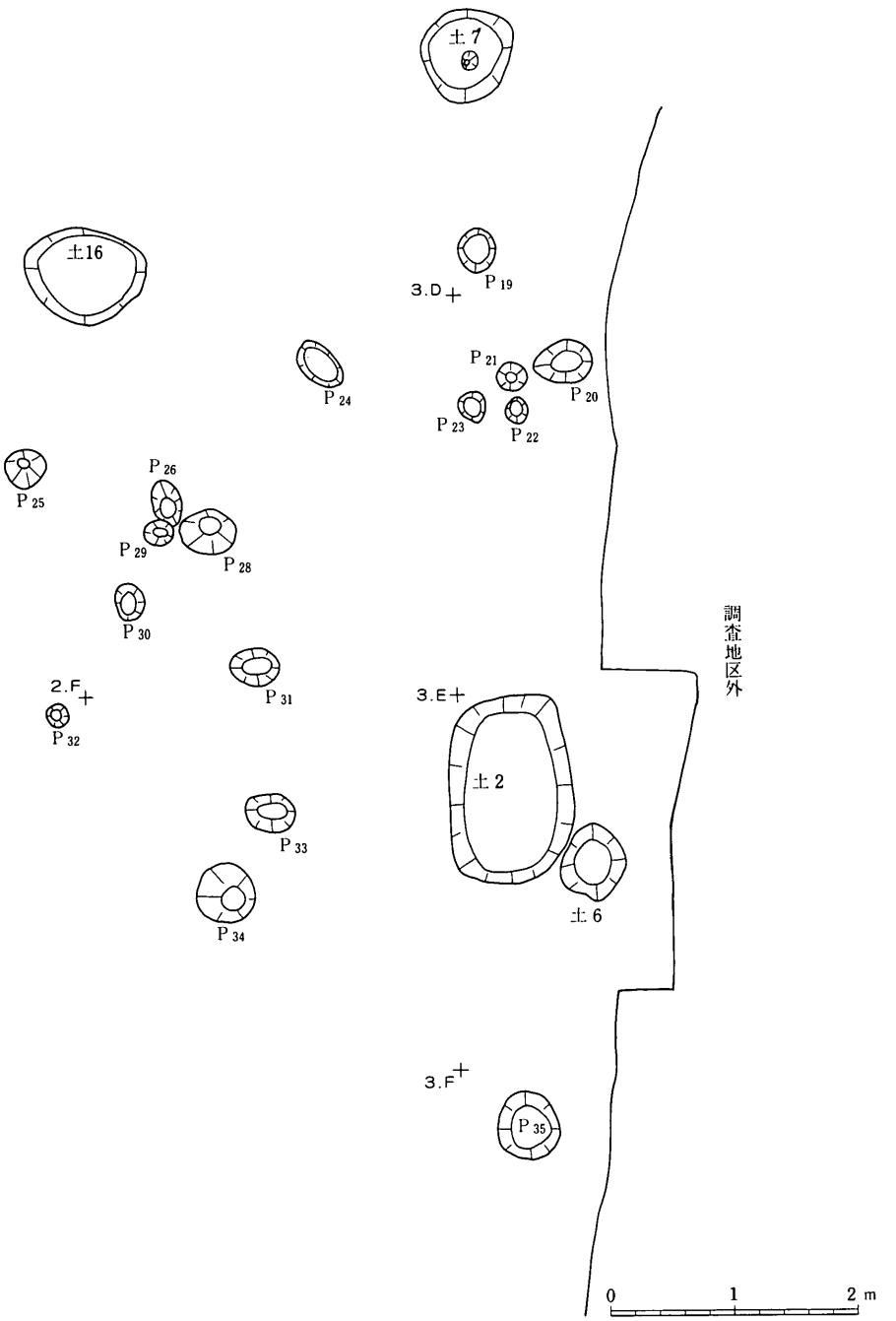
②大きさが50cm以下のものはピット

③炭化物及び焼土が混入するものは土壙

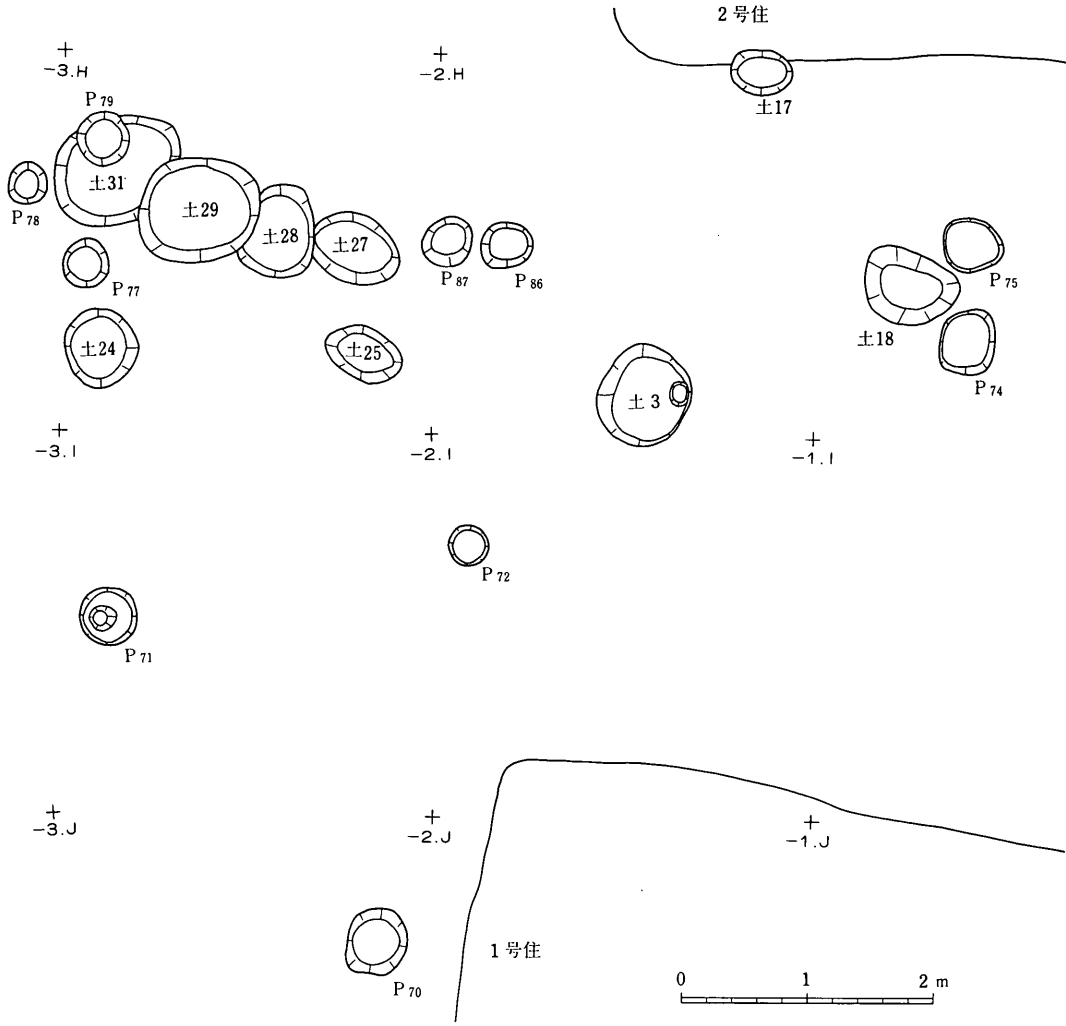
④炭化物及び焼土が混入しないものはピット

以上の基本に個々の土層観察の結果を加えて区別した。特に炭化物及び焼土の混入については、火葬墓あるいは土壙墓等の可能性があると考えられるため特に注意した。ただしこの考え方は土壙という用語に対して統一的な考え方がない現在、苦しまぎれに区分したもので普遍性を持つものではない。

本調査で確認された土壙は30基である。調査地区内での分布状況は北側からみると第３号住居址南側、第２号住居址と第１号住居址の間、調査地区南東隅周辺に多く出土している。平面形は楕円形が最も多く19基を数え、円形54基、隅丸長方形３基、方形２基、長方形１基である。最も大きなものは土壙21で170×100cm、深さ44cmを測る。焼土及び炭化物を含むものは土壙２、18、30の３基、焼土のみを含むものは土壙６の１基である。しかし量的にはいずれも少なく埋土内にわずかに混入するものが多いが、土壙２及び30については他とやや異なっている。土壙２はⅠ層とⅢ層にやや大きめの焼土と炭化物が混入する。また検出面でも焼土が見られた。土壙30は検出面でかなり多量の


土7
土16
3.D
P19
P21
P20
P24
P23
P22
P25
P26
P29
P28
P30
P31
2.F
P32
3.E
土2
P33
土6
P34
3.F
P35
調査地区外
0
1
2 m

第15図　土壙・ピット(2)



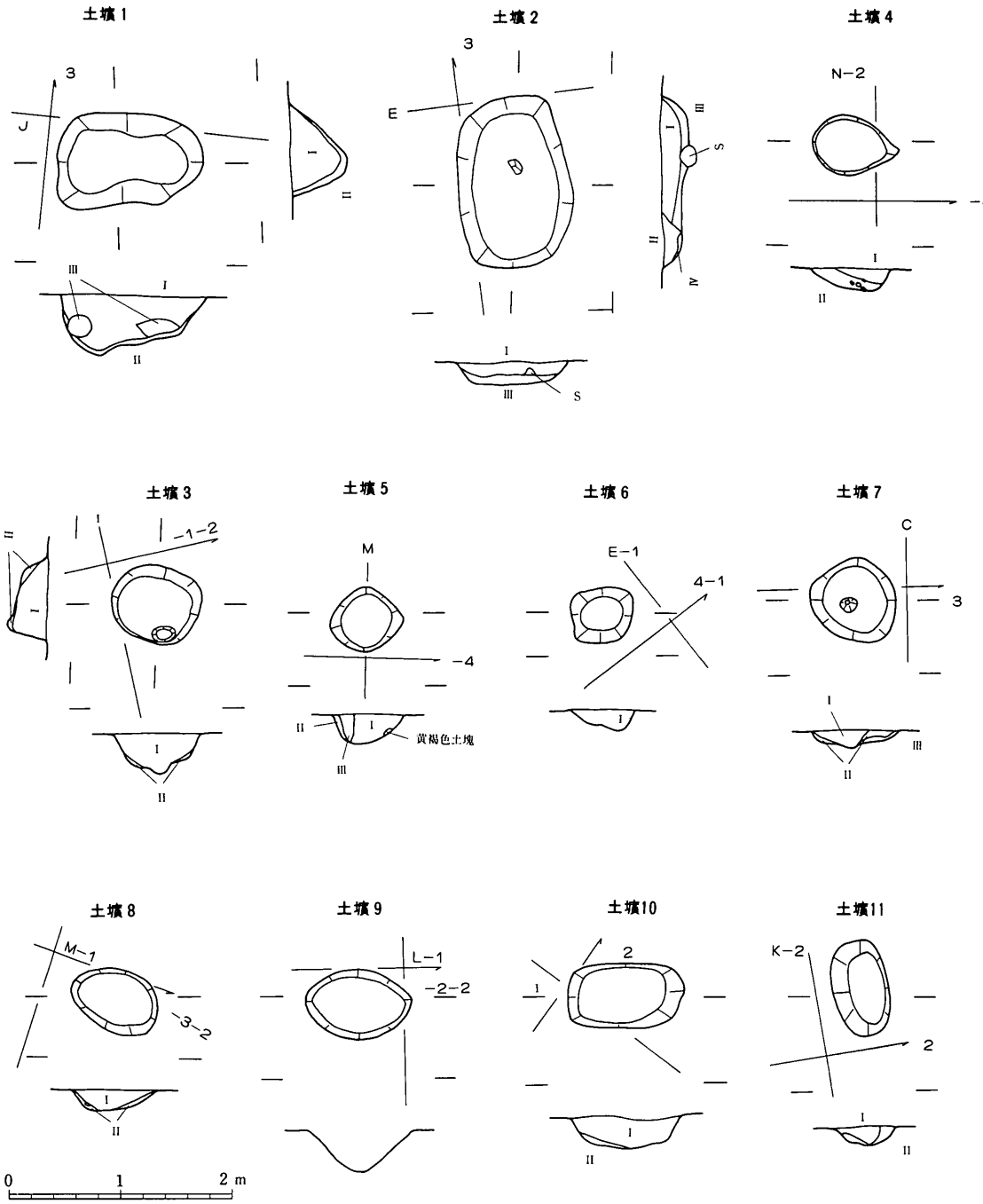
第16図　土壙・ピット(3)

焼土が確認されたので火葬墓の可能性が考えられたが、底部までが12cmしかなく、また遺物も土師器甕の破片1片のみで確証を得ることができなかった。

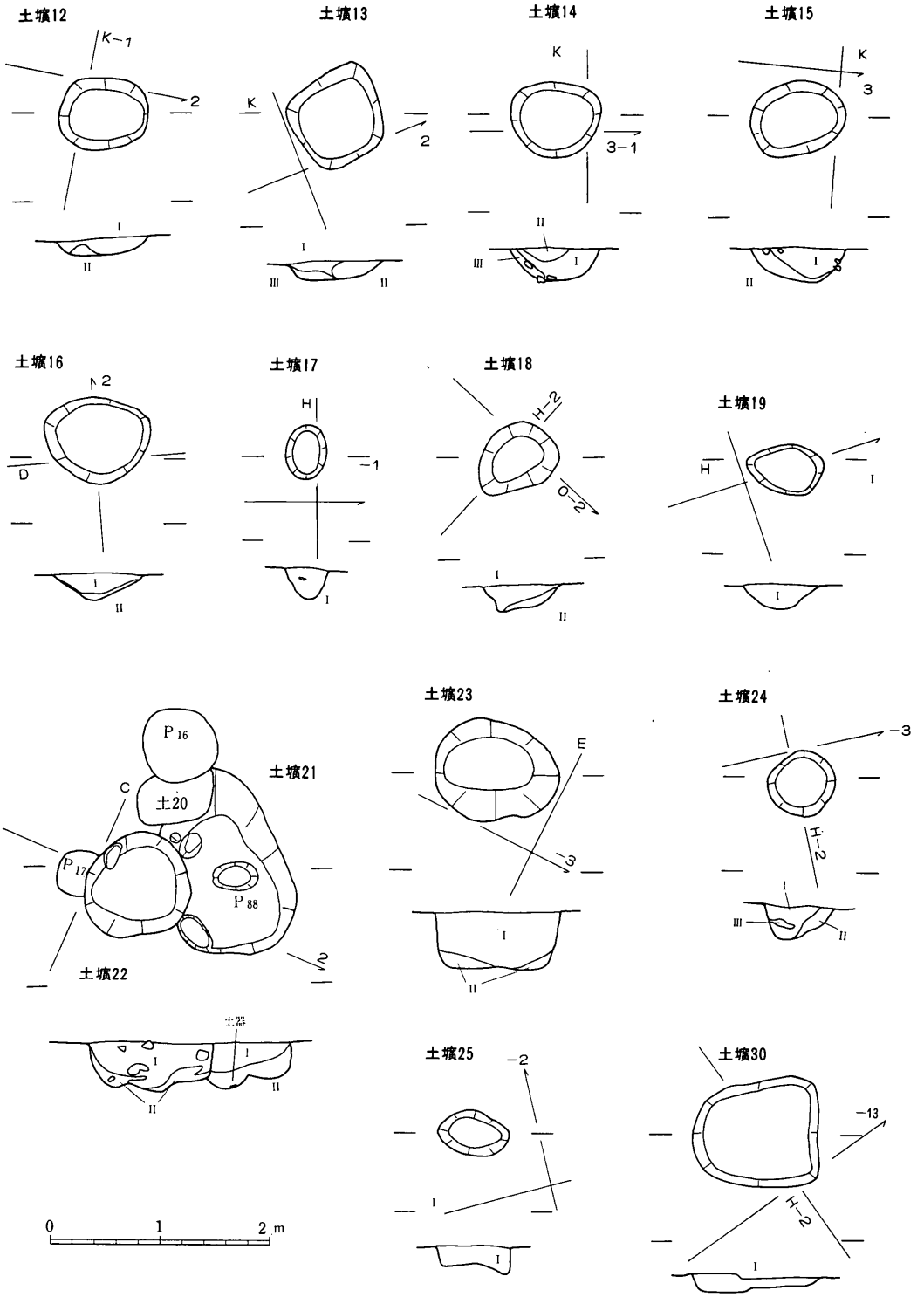
遺物の出土は全体に少なく、図示しえたものは6点のみであった。遺物の出土した土壙は土壙5、7、8、18、21、22、29、30、31、32の10基である。この内出土量の最も多かった土壙は土壙21であり、最も多く出土したものは縄文晩期土器片であった。しかし、ほとんど細片で磨滅しているものも多く、また出土状態も人為的と思われるものはない。このため土壙の性格及び時期等の確認が得られなかった。

次にピットであるが、検出されたものは101基におよび、調査地区内での分布状況を見ると土壙の出土状況とかさなる部分がある。第3号住居址南側、礫層上面、第1・2号住居址の間及び第1号住居址周辺である。第1号住居址周辺のものについては柱穴と思われるものもあったが連続するものがなく掘立柱建物址と推定されるものは確認できなかった。

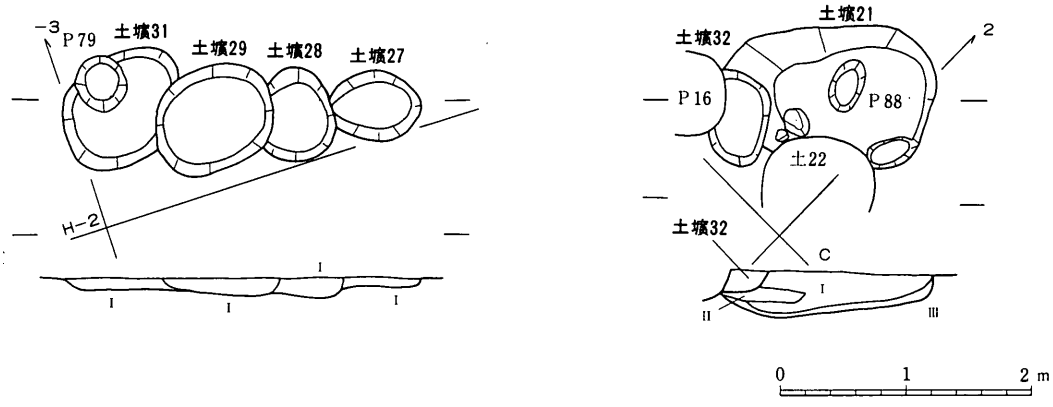
遺物の出土は少なく図示しえたものは、P_{39}出土縄文晩期の土器のみで、他は細片である。



第17図　土壙(1)


土壙12
土壙13
土壙14
土壙15
土壙16
土壙17
土壙18
土壙19
土壙21
土壙22
土壙23
土壙24
土壙25
土壙30
P 16
土20
P 17
P 88
0
1
2 m

第18図　土壙(2)


-3
P79
土壙31
土壙29
土壙28
土壙27
H-2
I
I
I
I
土壙21
土壙32
2
P16
P88
土22
土壙32
C
I
II
III
0
1
2 m

第19図　土壙(3)

土 壙 一 覧 表

番号	位置 縦軸	位置 横軸	平面形	大きさ (cm)	残存高(cm)	出土遺物	備考
1	3・4	J・K	長方形	130× 82	54		東側がやや張出す
2	3	E・F	隅丸長方形	150×100	20		焼土粒，炭化物含む
3	−1・−2	H・I	円形	径 70	36		東側が深い
4	−4・−5	N・O	楕円形	70× 52	20		
5	−4・−5	L・M	楕円形	65× 60	26	土師No.52	
6	3・4	E・F	円形	54× 50	18		焼土粒を含む
7	3	C・D	円形	径 76	16	縄文3　土師1	
8	−3・−4	M・N	楕円形	80× 57	18	土師1	
9	−2・−3	L・M	楕円形	100× 60	36		
10	2・3	H・I	隅丸長方形	100× 60	26		
11	1・2	K・L	楕円形	83× 60	16		
12	2・3	K・L	楕円形	80× 65	14		
13	1・2	J・K	方形	90× 90	18		
14	2・3	K・L	楕円形	80× 67	30		
15	3・4	K・L	楕円形	88× 65	30		
16	2	D	楕円形	94× 66	24		
17	−1・−2	I	楕円形	50× 40	28		2住を切る
18	0・1	H・I	不整楕円形	78× 58	24	縄文No.69　土師4　須恵No.54　1（不明）	I層に焼土粒，炭化物含む
19	1	G・H	不整楕円形	72× 44	22		土21を切る，P_{16}に切られる
21	2	B・C	隅丸長方形	170×100	41	縄文73　土師No.58，59　他9　須恵2	3住を切る，土22，32　$P_{18,68}$に切られる
22	2	B・C	円形	径 100	44	縄文No.65　他5　土師16　須恵1　12（不明）	土21，P_{17}を切る
23	−3・−4	E・F	楕円形	110× 90	49		
24	−2・−3	H・I	円形	径 60	30		
25	−2・−3	H・I	楕円形	65× 40	21		
27	−2・−3	H・I	楕円形	(75)× 55	5		土28に切られる
28	−2・−3	H・I	楕円形	74×(50)	15		土27を切る，土29に切られる
29	−2・−3	H・I	楕円形	100× 80	12	縄文2　土師15	土28，31を切る
30	トレンチ		方形	112×100	14	土師1	上部に焼土粒有
31	−2・−3	H・I	楕円形	92×(74)	10	縄文1　土師2	土29，P_{79}に切られる
32	2	B・C	楕円形	70× 45	16	縄文8　2（不明）	土21を切る，P_{16}に切られる

ピット一覧表

番号	位置 縦軸	位置 横軸	平面形	大きさ(cm)	残存高(cm)	備考
1	0・-1	B・C	円形	径 22	14	
2	0・-1	B・C	円形	径 28	22	
3	0・-1	B・C	円形	径 25	8	
4	0・-1	C・D	円形	径 45	14	
5	0	B・C	円形	径 50	66	二重底　縄文1
8	0・-1	B・C	楕円形	70×47	34	
7	0	C	円形	径 55	52	縄文11　無文の土器片1
6	0・-1	C・D	円形	径 30	17	土師2
9	0・-1	C・D	円形	径 23	8	
10	0・1	C・D	円形	径 35	39	土師1　須恵1
11	0・1	B・C	円形	径 45	16	
12	0・1	C・D	楕円形	40×33	50	土師2　不明1
13	0・1	C・D	円形	径 35	20	縄文1
14	0・1	C・D	円形	径 25	35	
15	1・2	B・C	円形	径 50		3住に切られる。
16	1・2	B・C	円形	径 65	41	土32土師8を切る縄文4
17	2	B・C	円形	径 (40)	21	土20を切る
18	1・2	C・D	円形	径 20	16	
19	3・4	C・D	円形	径 35	22	
20	3・4	D・E	楕円形	48×35	30	
21	3・4	D・E	円形	径 22	15	
22	3・4	D・E	円形	径 20	15	
23	3・4	D・E	円形	径 23	20	
24	2・3	D・E	楕円形	45×28	17	土師3
25	1・2	D・E	円形	径 35	20	縄文1
26	2・3	D・E	楕円形	(46)×25	17	P29に切られる
27						
28	2・3	D・E	楕円形	45×35	16	
29	2・3	D・E	円形	径 24	13	P26を切る
30	2・3	D・E	楕円形	30×20	12	

番号	位置 縦軸	位置 横軸	平面形	大きさ(cm)	残存高(cm)	備考
31	2・3	D・E	楕円形	40×30	15	
32	1・2	E・F	円形	径 20	27	
33	2・3	E・F	楕円形	40×30	19	
34	2・3	E・F	円形	径 45	28	
35	3・4	F・G	円形	径 50	35	
36	1・2	F	楕円形	53×45	29	
37	1・2	E・F	円形	径 43	15	
38	0・1	E	円形	径 33	15	土師1
39	0・1	E・F	楕円形	40×35	30	縄文2 No.64, 71　不明1
40	0・1	E・F	円形	径 60	30	
41	3	G・H	楕円形	52×40		
42	1・2	G・H	不整円形	径 38	26	
43	1・2	G・H	楕円形	48×45	5	土師1
44	1・2	G・H	楕円形	50×40	29	
45	3・4	H・I	円形	径 45	29	
46						
47	3・4	I・J	円形	径 (40)	25	
48	2・3	I・J	楕円形	40×25	23	
49	2・3	I・J	楕円形	56×40	19	
50	2	I・J	楕円形	(40)×35	18	P51に切られる　縄文1　土師2
51	2	I・J	楕円形	45×37	17	P50を切る
52	1・2	I・J	楕円形	50×35	21	
53	1・2	J	円形	径 20	29	
54	2	J・K	楕円形	56×40	16	
55	2・3	J・K	楕円形	40×35		土13に切られる
56						
57	0・1	K・L	楕円形	46×35	24	二重底
58	0・1	K・L	不整形	45×32	27	土師1
59	0	K・L	円形	径 30	17	
60	0・-1	L・M	楕円形	40×30	24	

番号	位置 縦軸	位置 横軸	平面形	大きさ(cm)	残存高(cm)	備考	番号	位置	平面形	大きさ(cm)	残存高(cm)	備考
61	0・-1	L・M	円形	径 40	23		102	トレンチ	円形	径 45	10	P101，103 に切られる
62	-2・-3	M・N	楕円形	45×35	50		103	〃	円形	径 20	8	P102 を切る
63	-2・-3	N・O	円形	径 16	7		104	〃	不整楕円形	60×45	17	
64	-3・-4	N・O	楕円形	30×27	5		105	〃	円形	径 20	9	
65	-5・-6	N・O	楕円形	35×20	5		106	〃	円形	径 25	12	
66	-5・-6	N・O	円形	径 35	22		107	〃	楕円形	20×15	20	
67	-5・-6	M・N	円形	径 30	32		108	〃	円形	径 20	15	
68	-3・-4	L・M	楕円形	60×(50)		P69に切られる	109	〃	楕円形	30×25	10	
69	-2・-3	L・M	楕円形	45×35	22		110	〃	円形	径 25	17	
70	-2・-3	J・K	円形	径 50	30		111	〃	楕円形	43×35	15	
71	-2・-3	I・J	円形	径 46	45	二重底	112	〃	円形	径 25	18	
72	-1・-2	I・J	円形	径 33	40		113	〃	円形	径 25	24	
73	-1・-2	I・J	楕円形	25×20	23		114	〃	円形	径 25	25	
74	0・-1	H・I	楕円形	50×45	14		115	〃	円形	径 23	5	
75	0・-1	H・I	楕円形	50×40	31	土師2　不明3	116	〃	円形	径 30	20	
76	-4・-5	J・K	楕円形	30×25	32		117	〃	円形	48×35	25	
77	-2・-3	H・I	円形	径 35	11		118	〃	円形	径 15	10	
78	-3・-4	H・I	円形	径 30	18		119	〃	円形	径 15	5	
79	-2・-3	H・I	円形	径 40	10	土31を切る　土師2	120	〃	円形	径 23	20	
80												
81												
82												
83												
84	-3	D・E	円形	径 25								
85	-4・-5	L・M	円形	径 28	29							
86	-1・-2	H・I	円形	径 38	10							
87	-2	H・I	円形	径 40	10							
88												
100	トレンチ		楕円形	80×60	40							
101	〃		円形	径 40	13	P102 を切る						

第3節　遺　　物

1．住居址出土の土器

3棟の竪穴住居址からは、土師器・須恵器・灰釉陶器等の多数の土器が出土した。各住居址毎、若干の所属時期の違いがみられるので、遺構別に概観してみたい。また検出面からも若干の同時代の土器が出土しているので、併せてここで触れたい。

(1)　第1号住居址出土の土器（第20図1～17）

土師器と灰釉陶器があり、器種では土師器に坏・皿・埦、灰釉陶器に段皿・碗・瓶類がある。土師器についてみると、すべて食器類で、成形技法上もすべてロクロナデ、底部回転糸切りで、埦類はこれに高台が付されるだけである。内面のヘラミガキあるいは黒色処理は僅かに11にみられるのみで、全体としてこの調整は失われている。寸法（法量）も坏類において小形化が起って器高も皿の様に浅くなり、普通サイズの埦類（時に坏）と組み合わさって、中形・小形食器組成の土器様式の始まりの中に本址出土の土師器がいることがわかる。更に足高の高台をもつ埦（12）が標準の高さの高台をもつ埦類に混じって現れてくることも1つの特徴と言えよう。一方、灰釉陶器は腰の強く張る深碗と小形の段皿の組み合わせとなっており、長頸瓶になると考えられる瓶が2点伴っている。碗・皿の底面には回転ヘラケズリが行われている。

以上のことをまとめ、本址の編年的な位置を考えるために次のことを指摘したい。土師器では、①坏・埦類が中・小形に寸法の分化をしている。②足高の高台の器種が混じりはじめている。③内面ヘラミガキの埦も僅かに残る。④端部をつまみ上げる形態をもった坏・埦類が見られない。灰釉陶器では、⑤まだ底部の回転ヘラケズリが行われている。⑥腰の張る深埦の存在、等である。松本市内の他資料と比較すると、南栗遺跡（第一次）6住上層出土品[1]にやや間をおいて後続し、南栗遺跡（第二次）3住[2]とほぼ平行、北栗遺跡20住[3]にやや先行すると考えられる。年代については在地土器の研究が未だ充分ではないが概ね10C後半～11C前半という範囲に含まれると推定する。

(2)　第2号住居址出土の土器（第21図18～34）

須恵器が主となり、土師器が伴う。須恵器には、蓋・坏・壺・横瓶・甕があり、土師器は甕と、1点のみ坏がある。須恵器の坏類には無台のものと有台のものがあり、無台のものはいずれも底面にヘラによる切り離し痕を残す。体部は僅かに外反しながら大きく外開している。有台のものも底面の凹凸からみてヘラによる切り離しと考えられる。須恵器の蓋は1点のみで小破片だが、端部の内面が非常に緩い曲線を描いて下端に至っているのがわかる。土師器の坏は1点のみの出土で、胎土が非常に細かく焼成が良好で、本址の時期を更に下った頃に時々出土する。所謂甲斐型坏によく似ている。体部大半に手持ちヘラケズリがあることも観察できるが、時期的に古く、器形も異なるのではっきりしたことはわからない。須恵器の壺類は、29が広口壺、32が肩部に稜をもつ長頸壺の

口縁部にあたると考えられ、31は提瓶の口頸部のようだ。土師器の甕（27）は外面を縦のハケメで調整される長胴形の甕で口縁部が短く強く外反している。

以上の土器から本址出土土器群の時期的特徴を考えてみたい。第1に須恵器の無台坏に糸切り底のものが見当らないことが指摘できる。いずれもヘラ切り痕を残すが平底になっており、体部の外傾度からみて、糸切り技法導入直前の土器群とみたい。第2に須恵器の蓋の端部の形状が古い様相を示していることがあげられる。第3に土師器の長胴甕の形態の特徴があげられる。27は口縁部の形態が、南栗遺跡で分類した甕E－2[4]に近いものであり、外面に縦のハケメをもつ甕Eの中では比較的古い部類にはいる。第4に、在地産とみられる胎土をもつ土師器供膳形態のものが皆無であることも指摘できる。以上のこと、特に第1の点から考えて8C前半までの土器の様相を示していると考える。

(3) 第3号住居址出土の土器（第22図35～48）

土師器と須恵器があるが須恵器の量は少ない。土師器に甕・小形甕・鉢、須恵器に坏・壺がある。須恵器の坏は逆台形を呈し、底面はヘラ切り痕を調整で消している。土師器の甕は、非常に厚手で頸部のくびれのない長胴形のものと、薄手で頸部が「く」の字状を呈するものの2通りがある。厚手の甕は古墳時代後期からの伝統と考えられ、薄手のものは新しい要素を表しているとみたい。48の甕は球形の胴部と丸底をもち胎土が黄灰色を呈す非常に珍しい土器で他地域からの搬入品である。器形や調整からみて近江型の甕[5]に含まれると考えるが、細部に若干の違いがある。土師器の鉢(38)はロクロナデが施され、体部下半と底面は回転ヘラケズリがなされている。器形、成形ともに須恵器のものに類似していて珍しい。小形甕はナデだけのもの（39）と内外ハケメ調整のもの（40）があり、ロクロを使用するものはまだ現れていない。

本址の土器群は甕の様相からみて第2号住居址に先行する時期（7C末～8C初頭？）が与えられると考えている。

(4) その他出土の土師器・須恵器

住居址出土品と時期的に似るのでここで説明したい。須恵器は全般的に第2号住居址の時期に近い。即ちヘラ切り未調整の坏・壺底部・均しく丸い天井部をもつ大きな蓋（50）等がそうである。土師器の甕についても短く強く外反する口縁部は同じものである。52の土師器の坏と55の須恵器盤は時期の下るものであろう。

注(1) 松本市教育委員会『松本市島立南栗遺跡』1984 P90・91

(2) 松本市教育委員会『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』1985 P113

(3) 現在整理中 1987．3に報告書刊行予定

(4) 松本市教育委員会『松本市島立南栗遺跡』1986 P75 L7・8

(5) 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27－2

2．縄文土器（第25・26図）

今回の調査で出土した縄文土器の出土量は1500g前後である。この内、図示しえたもの60～74の15点である。所属遺構が確認できたものは3点のみであった。他は住居地内覆土中、土壙及びピット内、検出面からであるが住居址は勿論、土壙、ピットも当該時期には該当せず、全て後世の混入であるため摩滅が激しく、詳細は観察できなかった。これらの所属時期は晩期末で他の時期は無い。60～62は土器棺墓に使用されたもので、60は深鉢で土器棺1である。内外面ともに摩滅が激しい。口縁部に沈線を施し、端部には小突起を持つ。最大径は口縁端部にある。内外面調整はケズリをしたのちナデで3段階になされている。順序は下から上、方向は下から上への縦、右下から左上の斜、右から左の横となる。胎土内に砂粒を含み全体にもろい。61は甕で土器棺2である。口縁を一部欠く他ほぼ完形である。底部からほぼ直線的に立ち上り肩部に稜を持つ。口縁は肩部から外湾しながら開く。最大径は口縁端部にある。端部には小突起を持つ。外面調整はケズリのち口縁部のナデ。胴部は細密条痕が施されている。胴部の条痕より口縁部のナデが先行する。条痕は板状工具により貝がら条痕ににせられている。内面調整はケズリのちナデである底部に木葉痕を残す。胎土は石英粒を含む60よりはもろくなく摩滅もしていない。62は土器棺1内に外面を外にかぶされていた壺の胴部である。われていたが全て同一個体である。胴部のみのため器形は不明である。最大径は胴部上位にある。調整は内外面ともにケズリのちナデである。胎土は砂粒を多量に含む。全体に摩滅が激しくもろい。63～74は検出面及び住居址、土壙、ピット内出土である。全てが小破片で摩滅が激しく器形のわかるものは口縁部片の5点のみであった。63～65は甕である。端部に小突起を持つ。調整はケズリのちヨコナデが施されている。66、69は壺である。69は口縁部に沈線を施す。端部は平である。70～74は底部片のみで器形は不明である。

3．鉄製品

出土した鉄製品は5点である。種類は鎌2点、釘1点、不明が2点内1点は小片である。ここでは保存がよく形状をとどめる鎌について述べてみたい。

78は第1号住居址北東角付近の床面から出土した鎌である。3分されて出土したが状態はよく完形である。現形での全長は14cm前後、刃部の長さ8cm前後、着装部は6cm前後で、幅は刃部3cm、着装部3cmで幅にあまり変化はない。刃部中央付近は研ぎ減りしていて幅2.8cm程である。形態は全体が大きく湾曲し先端部を下にすると「し」の字状になる。79は第3号住居址北面角付近の床面から出土した鎌である。さびの付着は78よりも著しくややもろい。2分されて出土したが完形となる。現形での全長は13cm前後、刃部の長さ10cm前後、柄着装部は3cm前後で、幅は2cm、着装部2.2cmでほぼ同じ幅である。刃部中央付近がやや研ぎ減りしている。形態は先端に向かって真すぐ伸び、先端部付近で湾曲する。刃部と柄着装部の区別が明確ではない。折り返しは一部しか確認できないが、本来は身に対して直角になっていたであろう。

4．石器

出土石器は、石鏃、ピエス・エスキーユ、打製石斧、磨石の25点である。その概要を以下に述べる。

1）石鏃（第27図）

未製品も含め全部で6点出土した。すべて黒曜石製である。形態についてみると、平基（4）凹基有茎（1、2）凸基有茎（3）がある。4は、器全体の厚さがほぼ等しく、調整加工のえぐり込は浅い。両側縁はつぶれている。背面中央には調整加工前のポジティヴな剥離面が残されている。先端部は欠けている。1、2は調整の仕方、大きさ重量共ほぼ等しい。1の先端部はわずかに欠け2の先端部は鋭く尖っている。1、2共、茎先端部は鈍い。3の茎先端部は鋭く尖らされている。

6は未製品である。A面はネガティヴな一枚の剥離面の両側縁に調整剥離が施され、先端部を作り出している。B面は主要剥離面両側縁に調整剥離が施され、先端部を作り出している。

2）ピエス・エスキーユ（第27図）

1点出土した。黒曜石製である。上下にわずかに階段状の剥離痕がある。

3）打製石斧（第27～29図）

16点出土した。14点のみ図示した。完形は6点ある。8、9、10は短冊形・偏刃に分類した。いずれも、基端部を含む上半部を破損している。8は細粒砂岩製、板状節理面を持つ。9は玢岩製、自然面が腹面の片側に残されている。刃部が磨耗している。10も玢岩製、腹面に自然面を残す。11も短冊形・偏刃に分類した。上半部は破損しているが長さ14cmを超え、幅も9cmを超える大形品である。硬砂岩製。12は撥形・偏刃に分類した。完形である。丁度刃部に自然石の丸みを帯びた部分が来るように、横長剥片をとっている。刃縁部は非常に良く磨耗している。背面の打瘤によって最も厚くなっている部分は、自然面側を深く剥離することにより、厚さを減じている。また、その付近の縁辺部には、着柄によると思われるつぶれ痕がある。硬砂岩製。13は短冊形・円刃に分類した。完形である。基部側面に自然面が残っている。片面には大きく板状節理面が残っている。14は短冊形・偏刃に分類した。ほぼ完形であるが、斜めになった刃部先端がわずかに欠けている。器中央より基部より両側縁に浅いえぐり込がある。着柄方法に関係があるのだろうか。全体的にわずかに風化している。縁泥片岩製。15は、全面自然面の外湾する面を片面に持つ短冊形、円刃の打製石斧である。ほぼ完形であるが、基部付近が一部欠けている。全体的に、剥離面が見えなくなるほど、風化している。硬砂岩製。16は短冊形・直刃に分類した。基部欠損。板状節理面を持つ。硬砂岩製。17は刃部付近のみである。短冊形・直刃に分類されよう。非常に風化している。安山岩製。18は刃部を含む下半部のみである。直刃である。板状節理面あり。石墨片岩製。19、21は共に短冊形・直刃である。19は器中央付近で折れたようであるが、21同様完形であれば20cm近い長さの大形品となるであろう。ホルンフェルス製。20は砂岩の丸石表面を剥離したもので、刃部が片側欠けている。基部に近い側縁は大きく抉られ、縁辺部はよくつぶれている。恐らく分銅形を呈していたのであろう。

注　石器実測図中　敲打痕範囲は←　→　磨耗痕範囲は⇦　⇨　で示した。

土器観察表

No	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	重さ(g)	残存度 口縁	底部	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
1	1住	土師器	皿	9.7	4.5	2.3	30	1/3	1/3	茶	茶	ロクロナデ，底部回転糸切り	
2	〃	〃	〃	9.5	5.1	2.6	15	1/6	1/3	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
3	〃	〃	坏	9.8	5.7	3.0	94	完		茶～黒褐	茶～黒褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
4	〃	〃	〃	10	5.5	3.4	39	1/2	1/3	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
5	〃	〃	皿	9.3	4.9	2.3	45	1/5	完	茶	茶	ロクロナデ，底部回転糸切り	
6	〃	〃	〃	9.4	4.2	2.4	61	2/3	完	黄灰褐～黒褐	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
7	〃	〃	〃	9.4	4.9	2.2	69	完		〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
8	〃	〃	埦	13.3	—	—	112	1/4	—	茶	〃	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリか？	付け高台の痕有り
9	〃	〃	〃	15.1	8.4	6.5	206	2/3	完	茶～黄茶	茶～黒	ロクロナデ，内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ	摩滅激しい，内黒か？
10	〃	灰釉	段皿	12.3	7.1	2.1	122	ほぼ	完	淡黄灰	灰白	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ	ツケガケ
11	〃	土師器	埦	—	6.7	—	51	—	1/2	暗茶	淡黒	底部回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ，内面ミガキ	内黒
12	〃	〃	〃	—	6.4	—	68	—	2/3	〃	明茶	底部回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ	
13	〃	灰釉	段皿	13.6	7.3	2.4	166	ほぼ	完	淡灰	黄灰	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ	ツケガケ
14	〃	〃	碗	17.6	—	—	55	1/3	—	〃	〃	ロクロナデ	ツケガケか？
15	〃	〃	瓶	—	7.2	—	215	—	完	灰白～明緑灰	灰白	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ	釉ハケ塗り
16	〃	〃	〃	—	11.0	—	364	—	完	淡灰～淡緑灰	淡灰	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ	〃
17	〃	〃	碗	15.6	7.2	6.8		2/3	完	灰～淡緑茶(赤褐)	黄灰	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ	内面赤褐色の付着物有り
18	2住	須恵器	蓋	15.2	—	—	10	1/8	—	暗灰	暗灰	ロクロナデ，端部ヨコナデ	
19	〃	〃	坏	—	8.9	—	55	—	1/2	黄灰	淡灰紫	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ	
20	〃	〃	〃	12.1	3.0	3.9	74	1/5	1/2	明灰～明茶	明灰～明茶	ロクロナデ，底部ヘラ切り	摩滅激しい
21	〃	〃	〃	12.6	6.8	3.5	90	1/3	1/4	灰～明茶褐	暗灰	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	内面還元不足
22	〃	〃	〃	6.4	—	—	5	1/10	—	明灰	暗灰～暗茶灰	ロクロナデ	
23	〃	〃	〃	14.6	3.6	4.1	86	1/3	1/2	淡黄灰	暗茶	ロクロナデ，底部ヘラ切り（未調整）	内面に棒状の鉄付着
24	〃	土師器	〃	12.6	4.4	(4.3)	36	1/10	1/2	明橙	淡橙	ロクロナデ（？），胴部下半手持ちヘラケズリ	甲斐型の坏か？
25	〃	〃	小形甕	—	5.7	—	21	—	1/6	暗褐	明茶	胴部カキ目，内面ナデ	
26	〃	須恵器	甕	25.6	—	—	54	1/8	—	明茶	〃	口縁部ヨコナデ，胴部タタキ目	
27	〃	土師器	〃	23.8	—	—	57	1/20		茶褐	茶褐	口縁部ヨコナデ，胴部外ハケ目内ナデ	
28	〃	〃	〃	—	7.6	—	79	—	1/5	明黄茶	明茶	胴部タテナデ，内面ヘラナデ	
29	〃	須恵器	広口壺	胴部最大径 11.5			45	胴部	1/3	明灰紫	明灰紫	ロクロナデ	
30	〃	〃	壺	11.1	—	—	111	—	1/3	黄灰～暗灰	暗灰	ナデ	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	重さg	残存度 口縁	底部	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
31	2住	須恵器	壺	11.1	—	—	250	1/8	—	淡灰～淡緑灰	淡灰～淡緑灰	ロクロナデ，口縁部ヨコナデ	
32	〃	〃	壺?	10.9	—	—	10	1/8	—	淡灰紫	淡黄灰	ロクロナデ	
33	〃	〃	壺	11.5	—	—	160	—	2/3	灰紫～暗灰	暗灰	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ	
34	〃	〃	横瓶	(12.0)	—	—	123	頸部	1/3	暗灰	灰	ヨコナデ，ナデ	
35	3住	〃	坏	—	5.3	—	34	—	1/3	淡灰	淡灰	ロクロナデ，底部ケズリか？	
36	3住P5	〃	広口壺	10.5	—	—	9	1/10	—	淡朱	灰	ロクロナデ，口縁部強いヨコナデ	
37	3住覆土	〃	短頸壺	16.4	—	—	36	ほんの一部		淡灰褐	淡朱	ロクロナデ，口縁部強いヨコナデ	
38	3住	土師器	鉢	20.8	9.1	10	1,085	ほぼ完		赤褐	黄茶褐	内面，外面胴部上半ヨコナデ，外面胴部下半ヘラケズリ	
39	3住覆土	〃	小形甕	11.7	—	—	60	1/5	—	暗褐～茶褐	暗褐～茶褐	内，外面ナデ，口縁部ヨコナデ	
40	3住カマド	〃	〃	—	6.3	(12.2)	121	—	完	黄褐～暗褐	黄褐～明褐	内，外面ハケ目，口縁部ヨコナデ	底部木葉痕有り
40	〃	〃	〃	8.4	—		53	一部	—	〃	〃	内，外面ハケ目，口縁部ヨコナデ	
41	3住	〃	甕	—	5.5	—	26	—	1/5	茶褐	黄褐	内面ナデ，外面ハケ目か？	
42	3住カマド	〃	〃	20.9	—	—	24	1/10	—	黄褐	〃	口縁内面ハケ目，口縁外面ヨコナデ	
43	〃	〃	〃	—	8.4	—	127	—	1/2	〃	〃	内面ナデ，外面ハケ目	底部木葉痕か？摩滅が激しい
44	3住	〃	〃	22.6	—	—	196	1/5	—	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	内面板ナデ，外面強い板ナデ，口縁ヨコナデのち内面ハケ目	
45	3住覆土	〃	〃	—	6.0	—	38	—	1/6	茶褐	茶褐	内面ナデ，外面ハケ目か？	底部木葉痕有り
46	3住床	〃	〃	—	6.9	—	240	—	完	暗褐～黒	黄茶褐	内面ナデ，外面ハケ目	底部木葉痕有り摩滅が激しい
47	3住	〃	〃	13.9	4.9	17.7	885	1/3	完	赤褐～暗茶褐	赤褐	内面輪積みのちナデ，外面輪積みのちケズリ	底部粗圧痕有り
48	3住P10	〃	〃	15.0	丸底	14.1	500	ほぼ完		明黄灰～褐	明黄灰～褐	内面，外面胴部上半ハケ目，外面胴部下半より底部までナデに近いケズリ，口縁部ヨコナデ	
49	検出面	須恵器	蓋	15.2	—	—	24	1/10	—	灰白	灰白	ロクロナデ，端部ヨコナデ，回転ヘラケズリ	
50	〃	〃	〃	19.6	—	—	64	1/8	—	黄灰（自然釉）	紫灰	ロクロナデ，端部ヨコナデ，回転ヘラケズリ	
51	〃	〃	壺	—	7.3	—	31	—	1/4	灰白	灰白	ロクロナデ，底部回転ヘラ切り	
52	土壙5	土師器	坏	11.3	—	—	6	ほんの一部		橙	橙	ロクロナデ，口縁部ヨコナデ	
53	検出面	須恵器	〃	15.0	7.1	3.7	101	1/5	完	淡灰	淡灰	ロクロナデ，底部回転ヘラ切り	
54	土壙18	〃	短頸壺	16.8			6	ほんの一部		暗灰	暗灰	ロクロナデ，端部ヨコナデ	
55	−6．G	〃	盤	—	—	—	89	——		淡灰	淡灰	内面ロクロナデのちミガキかハケ状のものでナデ，付け高台のちヨコナデ	
56	検出面	土師器	甕	18.4	—	—	74	1/4	—	茶褐	茶褐	口縁部ヨコナデ	
57	〃	〃	〃	19.7	—	—	26	1/6	—	明茶褐	明茶褐	口縁部ヨコナデ，内面ナデ，外面ハケ目	
58	土壙21	〃	〃	19.6	—	—	37	1/8	—	黄茶	黄茶	口縁部ヨコナデ	摩滅激しく，調整わからず
59	〃	〃	〃	19.1	—	—	47	1/8	—	明茶褐	明茶褐	口縁部ヨコナデ，内面ナデ，外面ハケ目	
60	土器棺墓	縄文	深鉢	28.2	—	—	2,110	ほぼ完		黄褐～明灰褐	黄褐～明灰褐	口縁部ケズリのちヨコナデ，内，外面ケズリのちタテからヨコナデ	土器棺1

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	重さg	残存度 口縁	底部	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
61	土器棺墓	縄文	甕	30.3	7.4	34.7		完		黄褐～褐	黄褐～褐	口縁部ケズリのちヨコナデ，内，外面ケズリのちタテからヨコナデ	土器棺2
62	〃	〃	壺	最大径27.5cm			1,057	黄褐		黄褐	黄褐	内，外面ケズリのちタテからヨコナデ	土器棺1内壺
63	検出面	〃	甕	23.8	—	—	37	——		暗黄褐	淡褐	内面ケズリのちナデ，外面ヨコ方向のナデ，端部	
64	P39	〃	〃	28.7	—	—	34	——		淡黄褐	淡黄褐		
65	土壙22	〃	〃	28.8	—	—	84	——		黄灰	淡黄灰		
66	検出面	〃	壺	19.4	—	—	10	1/15	—	赤褐	赤褐	ナデ	端部圧痕有り(指かヘラか？)
67	3住覆土	〃		—	4.2	—	26	—	完	淡黄灰	淡黄灰		
68	〃	〃		—	8.1	—	48	—	1/4	淡黄灰	淡黄灰		
69	土壙18	〃	壺	13.1	—	—	10	1/15	—	淡黄褐	淡黄褐	ヨコナデ	
70	3住覆土	〃		—	6.7	—	34	—	1/3	明茶褐	黄褐		
71	P39	〃		—	9.4	—	61	—	1/6	黄褐	暗褐		
72	3住覆土	〃		—	9.4	—	44	—	1/5	淡黄灰	淡黄灰		
73	検出面	〃		—	9.7	—	154	—	1/4	黄褐	黄褐		
74	3住覆土	〃		—	11.6	—	94	—	1/4	淡黄灰	淡黄灰		
75	検出面	〃	甕	—	—	—	34	——		暗褐	淡茶褐		
76	3住覆土	〃		—	—	—	15	——		淡茶褐	淡茶褐(赤色塗彩)		
77	〃	〃		—	—	—	6	——		〃	淡茶褐		

石器一覧表

石　鏃

No.	註　記	基　部	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石　質	欠損状況	備　考
1	3　住	凹・有	1.60	1.07	0.29	(0.3)	黒曜石	右　側　縁	
2	土壙21	凹・有	1.70	1.13	0.23	0.3	〃		
3	3　住	凸・有	2.17	1.21	0.35	(0.65)	〃	左　側　縁	
4	3　住	平・無	1.61	1.37	0.27	(0.6)	〃	先　端　部	
5	3　住	不　明	1.68	1.18	0.31	(0.5)	〃	下　半　部	
6	3　住		1.88	1.28	0.39	0.6	〃		未製品

ピエス・エスキーユ

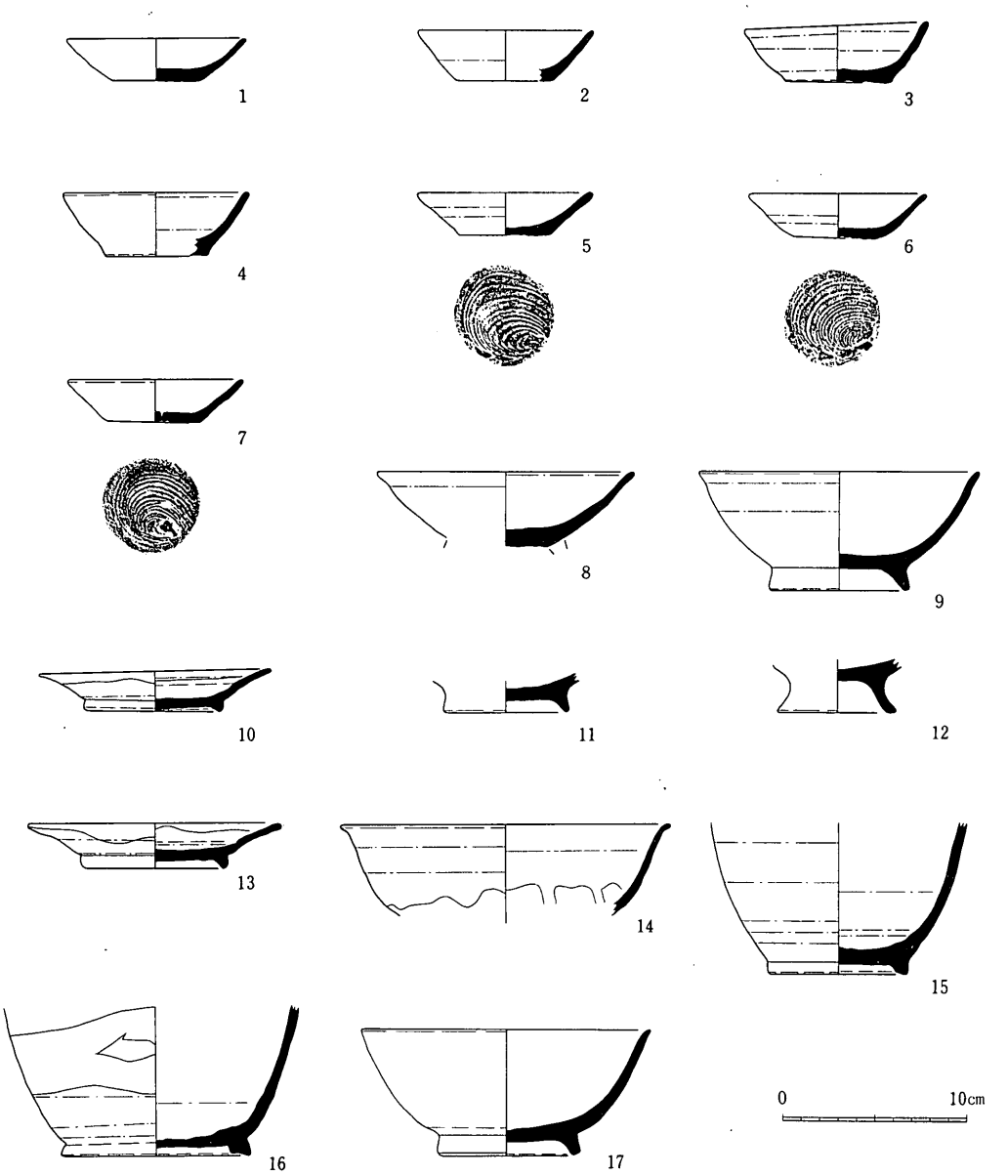
No.	註　記	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石　質	欠損状況	備　考
7	土壙21	2.65	1.09	0.71	1.1	黒曜石		

打製石斧

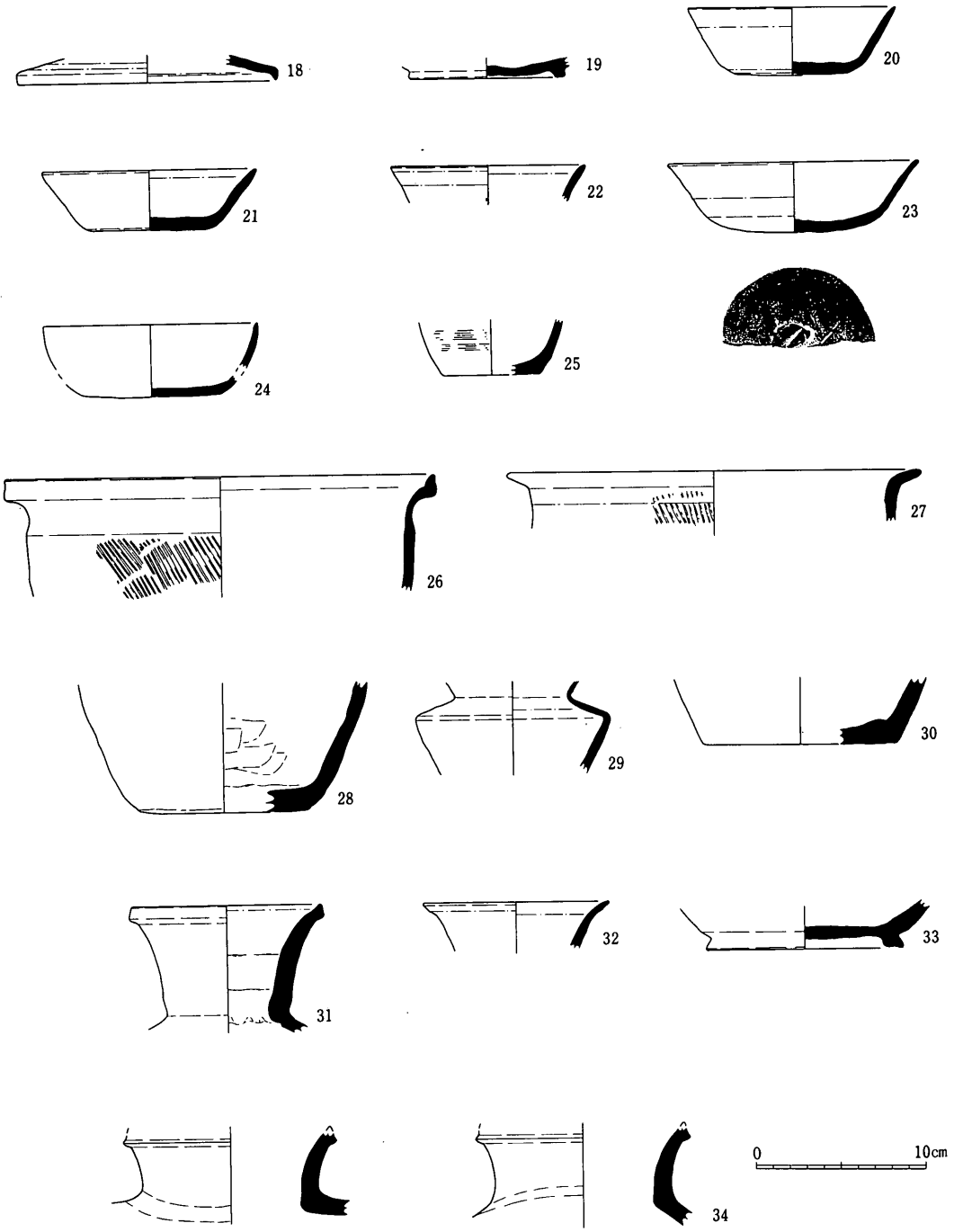
No.	註　記	形態	刃部	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石　質	欠損状況	備　考
8	土壙5	短冊	偏刃	(8.03)	4.20	1.19	(52)	細粒砂岩	上半部刃部一部欠	板状節理面
9	3　住	〃	〃	(7.62)	4.16	1.10	(49)	珪　岩	上半部欠	自然面，風化
10	土壙22	〃	〃	(8.91)	5.36	1.74	(94)	〃	〃	自然面
11	1　住	〃	〃	(14.23)	9.11	2.68	(420)	硬砂岩	〃	
12	検出面	撥	〃	10.73	5.85	1.72	130	〃		自然面，刃部磨耗，側縁部敲打痕
13	⑤	短冊	円刃	12.6	4.03	1.04	110	砂　岩		板状節理面，基部一部自然面
14	3　住	〃	偏刃	(13.55)	5.29	1.28	(145)	緑泥片岩	刃部一部欠	板状節理面，風化
15	排土内	〃	円刃	(11.82)	5.60	1.90	(195)	硬砂岩	基部一部欠	自然面，風化
16	Pit 77	〃	〃	(11.32)	5.08	1.38	(135)	砂岩ホルンフェルス	基　部　欠	板状節理面
17	Pit 10	〃	直刃	8.21	4.82	1.57	63	安山岩		風化
18	1　住	〃	〃	(7.94)	7.23	1.49	(145)	石墨片岩	上半部欠	板状節理面，側縁部敲打痕
19	排土内	〃	〃	12.23	7.46	2.88	(355)	砂岩ホルンフェルス	〃	自然面，側縁部敲打痕
20	土壙32	分銅	円刃	(12.76)	13.59	2.98	(522)	粗粒砂岩	刃部一部欠	自然面，側縁部・基部・縁部敲打痕
21	⑤	短冊	直刃	(18.5)	8.12	2.51	550	砂岩ホルンフェルス	基部一部欠	側縁部敲打痕
22	3　住	〃	偏刃	11.35	5.60	1.45	141	〃		板状節理面，風化
23	検出面	〃	直刃	(5.44)	4.62	0.92	(39)	砂　岩	上半部欠	自然面，風化

磨　石

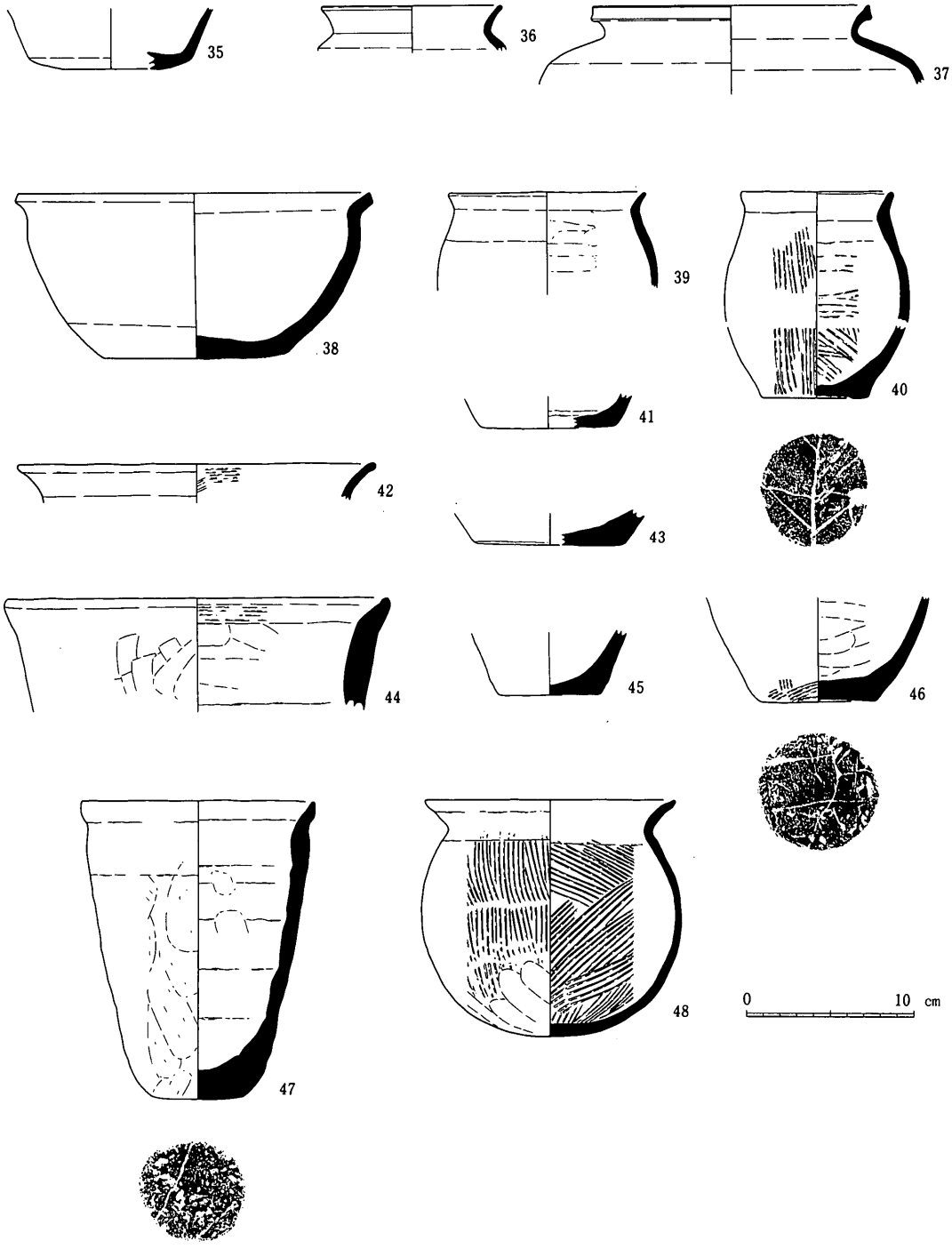
No.	註　記	磨　面	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石　質	欠損状況	備　考
24	3　住	4	20.1	12.62	5.61	2110	砂　岩		
25	縄文晩期土器棺1内	3	13.8	8.67	8.01	1510	〃	約 3／4 欠	



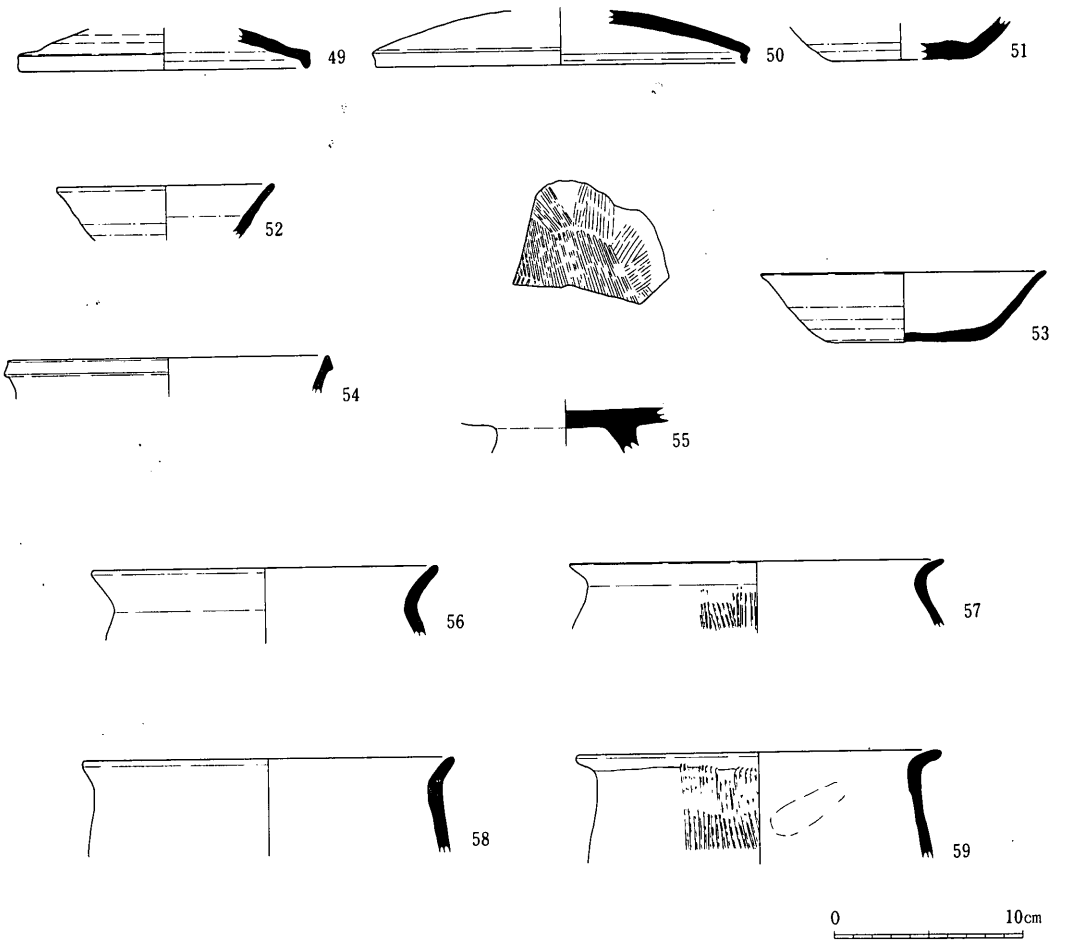
第20図　第１号住居址出土土器



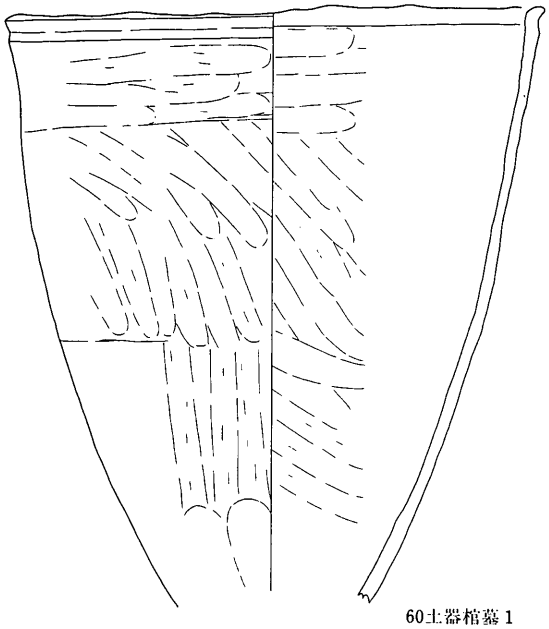
第21図　第２号住居址出土土器



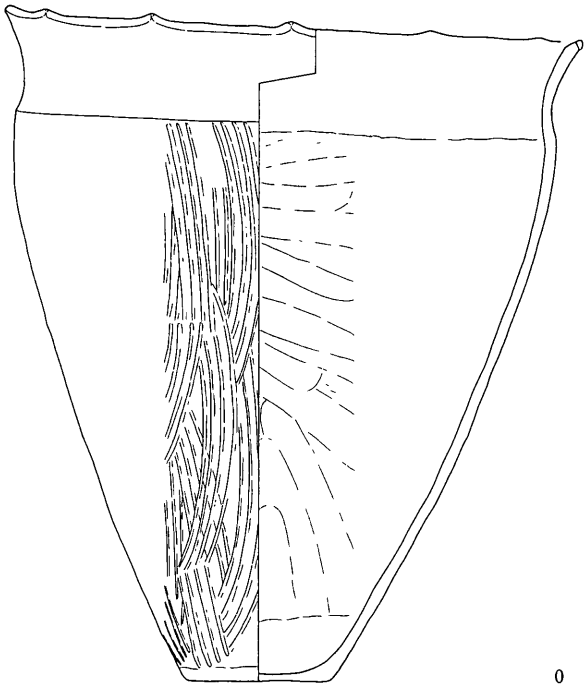
第22図　第３号住居址出土土器



第23図　土壙・ピット・検出面出土土器



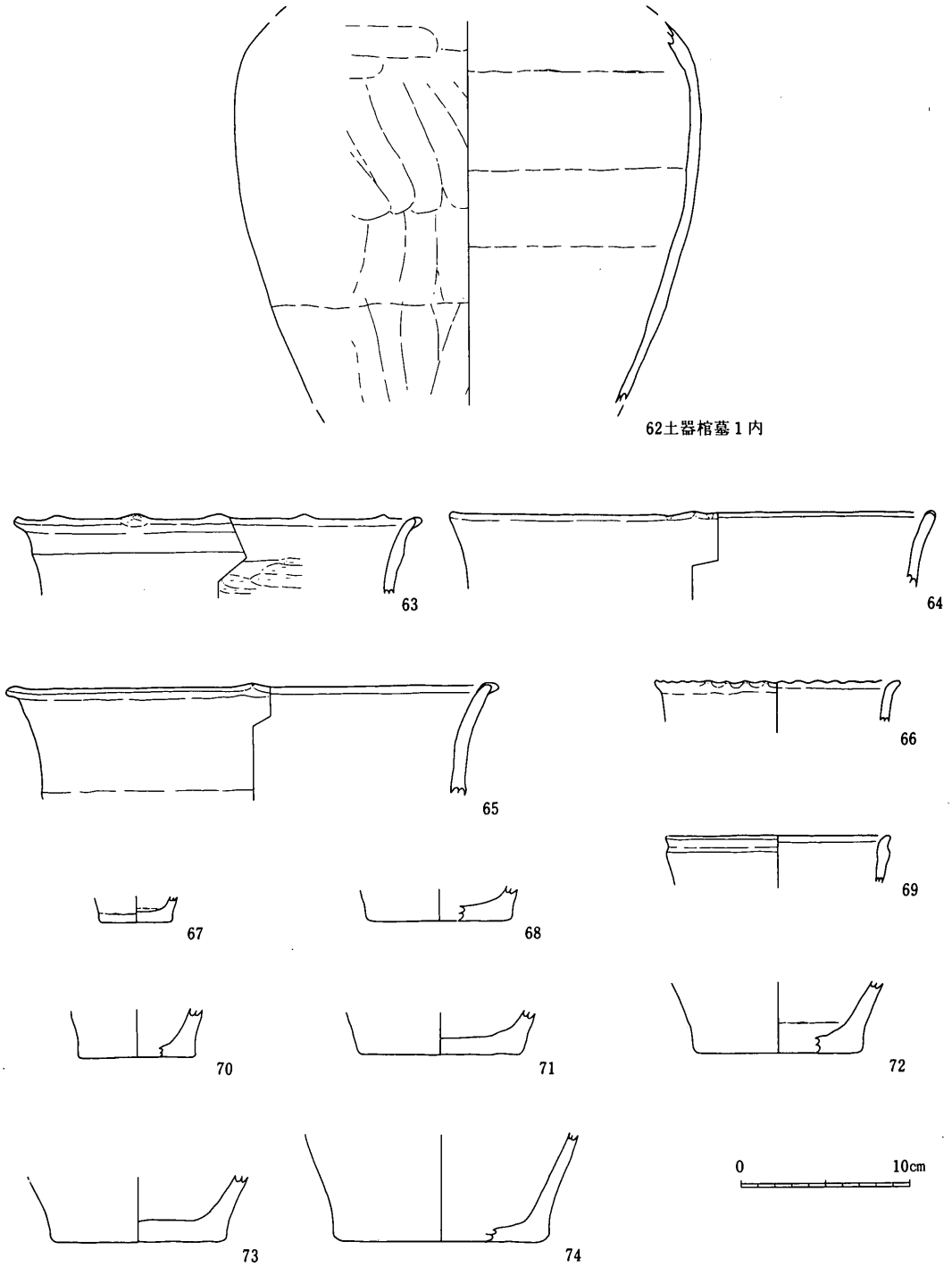
60土器棺墓 1



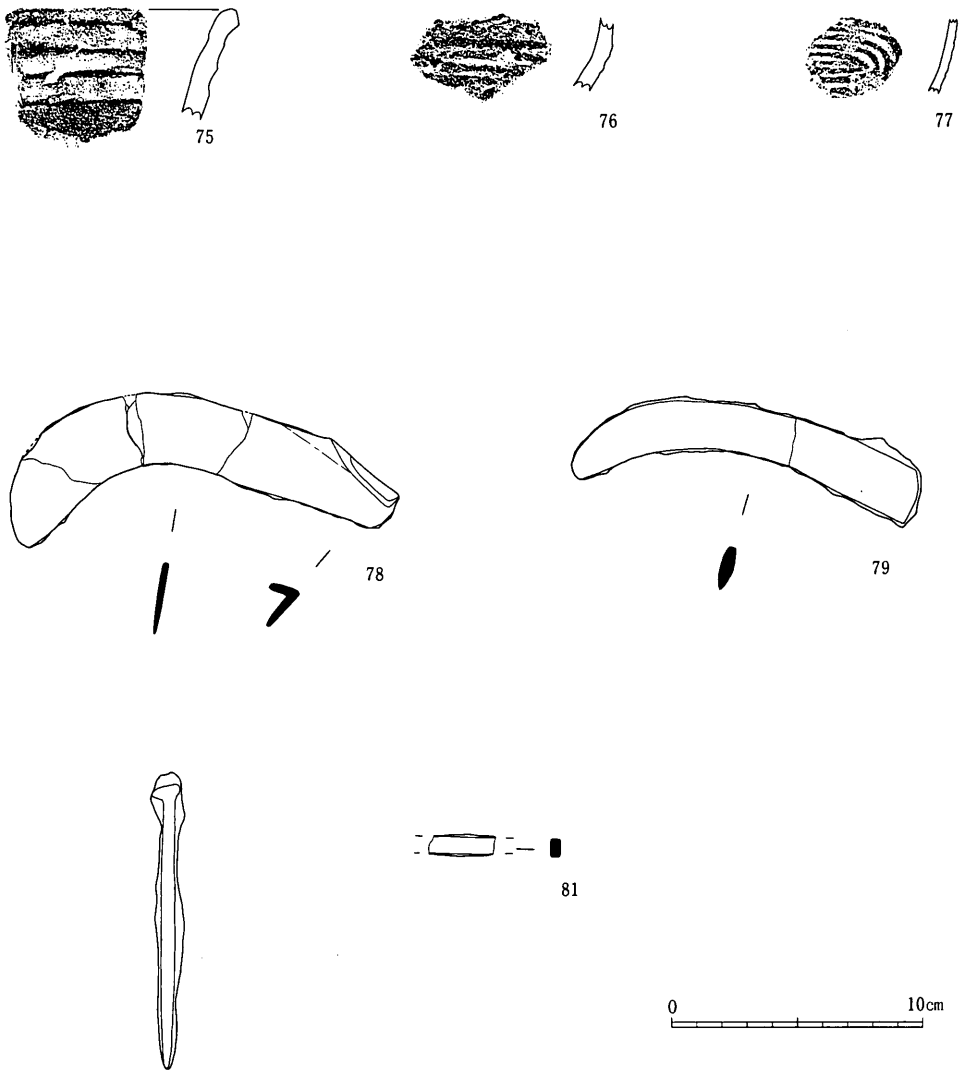
61土器棺墓 2

0　10cm

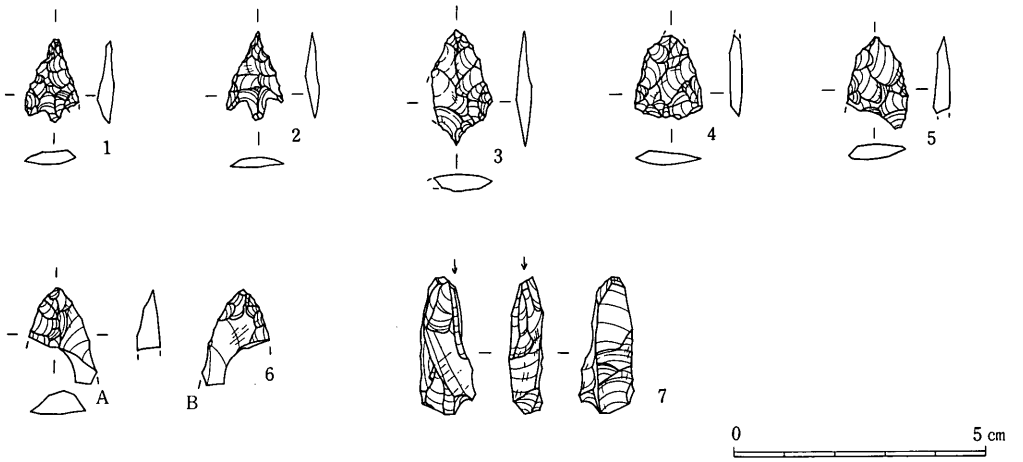
第24図　土器棺墓 1 ・ 2

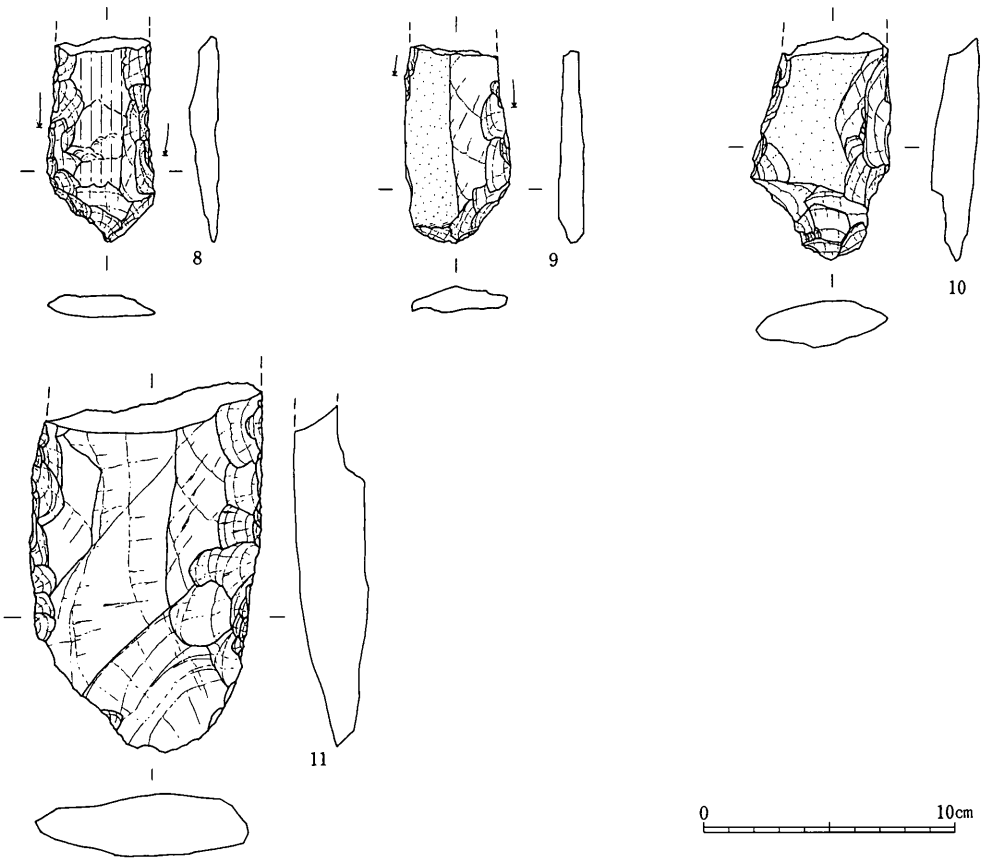


第25図　縄文土器

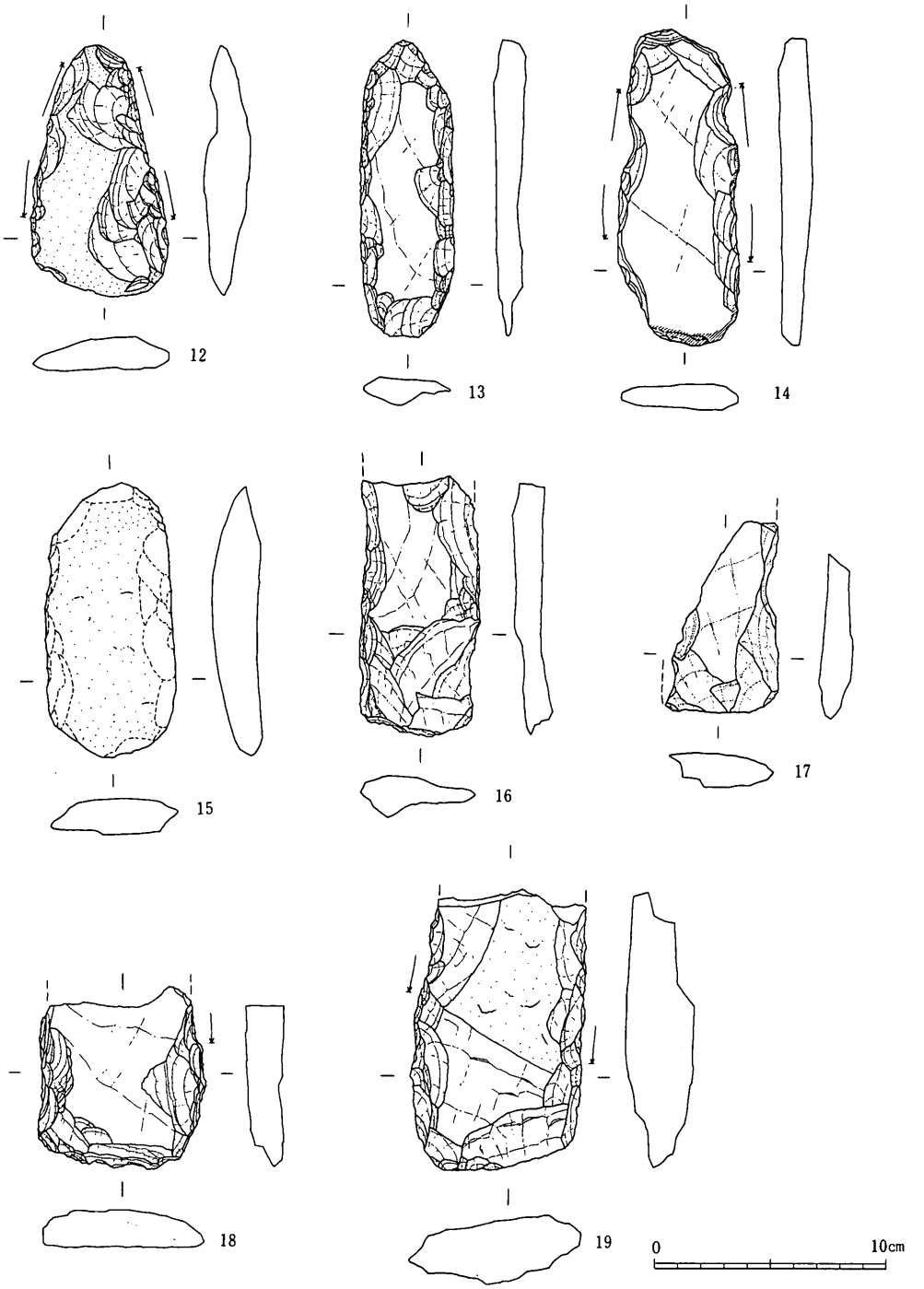


第26図　縄文土器・鉄製品

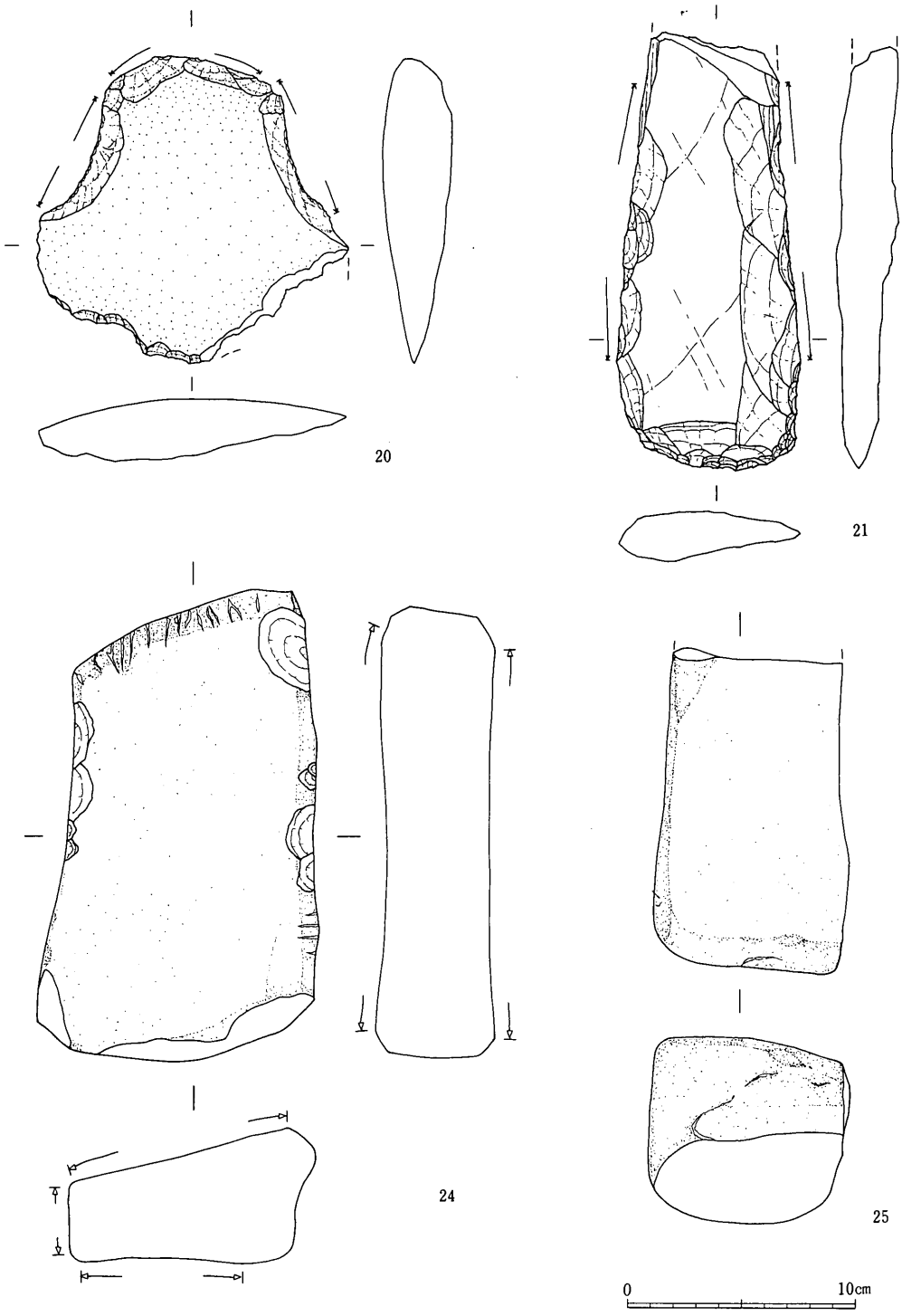




第27図　石器(1)



第28図　石器(2)



第29図　石器(3)

第4章　調査のまとめ

調　査　所　見

高畑遺跡は田川左岸に位置し、直線距離で400mである。田川や牛伏川の氾濫による水害は過去の文献にも記録として残っており特に明治29年の大洪水には牛伏川も氾濫し多大な被害を受けた。このように近年まで時々氾濫を繰り返していた田川や牛伏川付近には遺跡が存在しないと考えられていたが近年中央道長野線建設に伴う吉田川西の発掘調査により遺跡の存在が知られてきた。今回調査された当遺跡も知られていなかった遺跡の一つである。また東山道駅舎の一つである覚志駅が、当地周辺に予想されているが確認されず不明である。以下住居址を中心として所見を述べたい。

第1号住居址

前述したように床面上に約2～5cmの厚さに焼土及び炭化物、灰と思われる層が堆積していた。この層は、住居址内全体を覆っていたが特に顕著な部分のみ図示した。(第7図) なかでも特に多い所は南西隅周辺、北東隅周辺、カマド北側の一部であった。カマド北側は他と異なり上面を細い炭化物、これを除くと灰白色の灰層が数cmの厚さであり、床面上に掘り込み等は見られない。これはカマド脇であり、カマドからかき出された灰かと思える。他の層は堆積順にみるとほぼ次の様になる。床面直上に炭、次が焼土塊及び粒、そして炭と焼土の混りである。以上のことから炭化木材はみられなかったが、焼失住居と見たい。焼失の時期、原因については、遺物の出土状況を検討する必要がある。床面直上の遺物は出土量は少ない。土師器坏2点、灰釉段皿2点、瓶2点、鎌1点であり、カマド横東壁上に灰釉碗が出土している。この様に種別、種類が限られており、また出土場所も部分的なものである。覆土は短期間に埋められた様相を呈している。全体的に乱れがあり、地山のブロック（IV層）及び焼土粒、炭化物が混入している。下層のIII層は、炭灰とI及びII層が混り合った様な層をなしている。これだけで焼失原因を推定するには無理があろうと思うが、あえて記すと、出土遺物中に生活必需品（土器等の道具特に煮沸形態の土器）が少ないこと。完形に近い遺物についてはほとんどが床面直上より出土したこと、覆土の埋め土状況等から考えて、自然発生的な火災ではなく、人為的な火災が推測されると思う。また住居廃絶と住居焼失とは時間差がなく、同時性をもつものと思われる。推測される廃絶の順序は、①原因発生、②生活必需品の持ち出し、③焼失、④炭化木材の持ち出し、⑤埋め戻し、⑥石の投げ込み、⑦埋め戻しとなるもの、と思われる。

第 2 号住居址

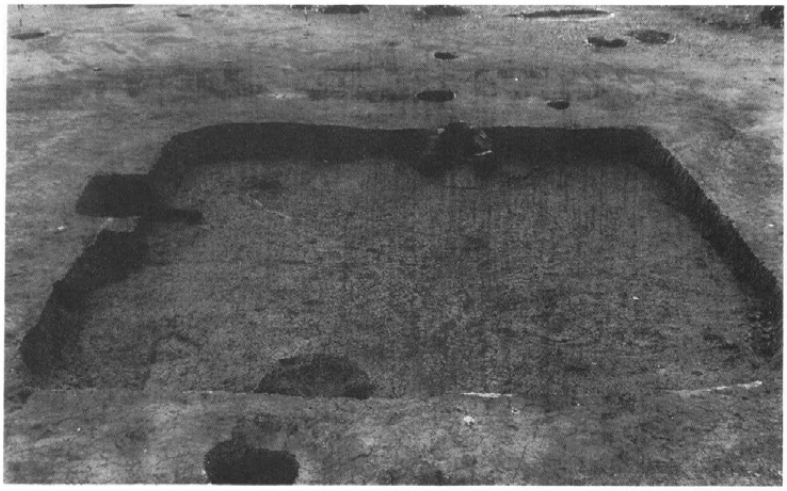
本址は、当遺跡の立地条件を知る上で重要な意味をもっている。本址の調査地内での位置は、北東側を横切る、古い流路（田川の押出し）の上に構築されており、構築時期にはこの流路が安定していたことを示す。そして、もし構築時期以降に川の押し出しがあれば、住居址内の覆土にその痕跡が認められてもいいと思うが、川の押し出しで埋没したとは認められない。これは他の住居址でも同様である。調査地区は当遺跡範囲の一部にすぎないため、これで全体を測るのは危険であるが少なくとも調査地区周辺は、第 2 号住居址構築以降の時期は地形的に安定していて集落が営める状態であったと推定される。

第 3 号住居址

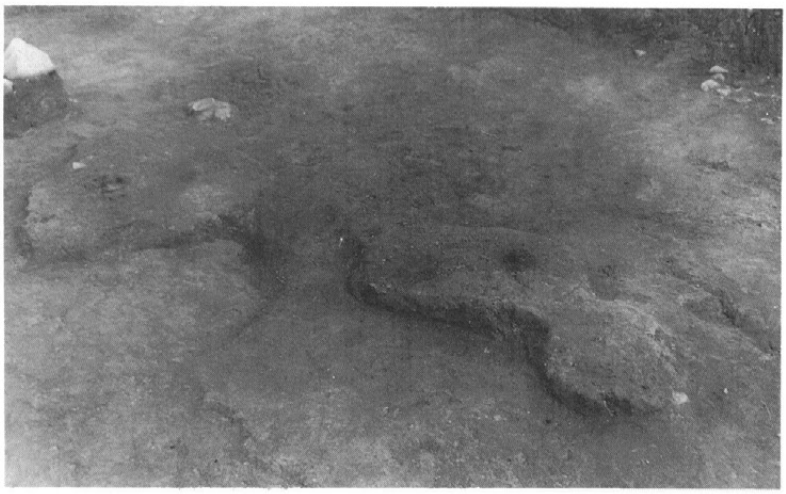
本址は、古墳時代末期に比定される住居址であり、特徴は出土遺物にある。P_{13}から出土した土師器甕48は、第 3 章第 3 節で詳述したように当地域にない形態及び成形上の特徴を有しており、他の地域からの搬入品であることは明らかである。前記したように当遺跡周辺は東山道覚志駅とする説もあり、古来重要な地区であったことが窺える。

おわりに

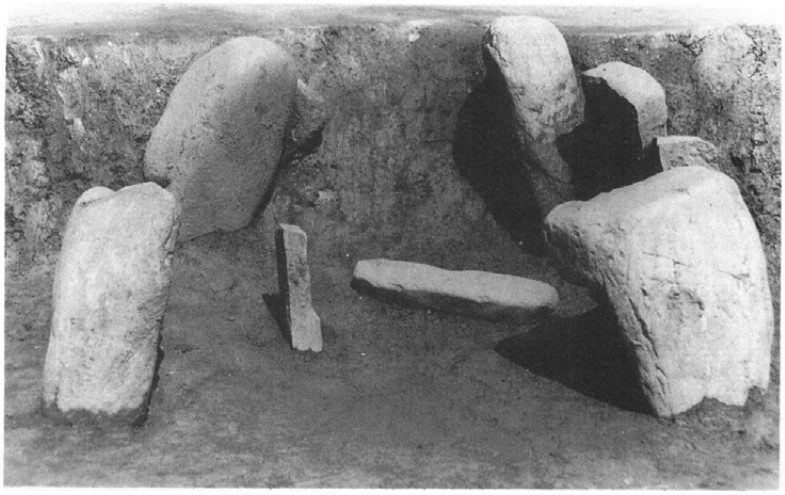
本調査は、前述したように芳川地区の歴史だけでなく、当地方の古代史解明にも大いに意義あるものであったと思う。準備から実施までが短期間であったため、作業進行上なにかと不備な点もあった。しかし、芳川地区では初めての本格的な調査であり、地元の方々の関心も高かったので調査に参加するなどの協力により、無事終了することができた。また調査中なにかとお世話いただいた芳川公民館、西村勲氏、関係機関に対して衷心より感謝を申し上げる。



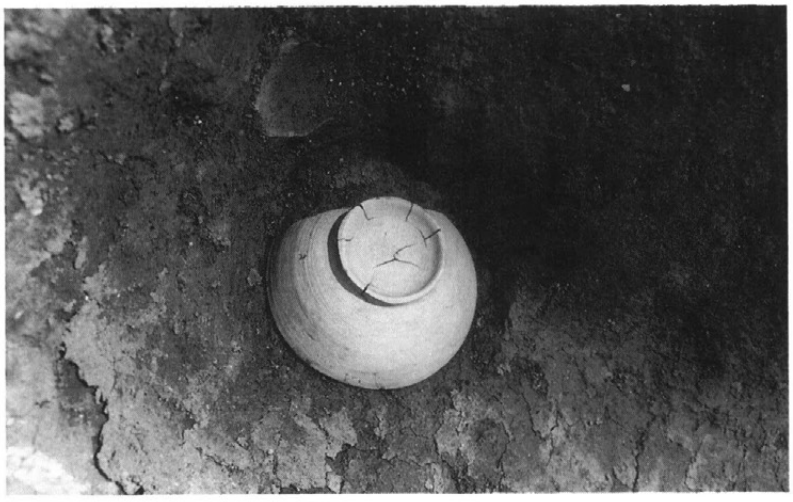
第１号住居址



第１号住居址
炭化物



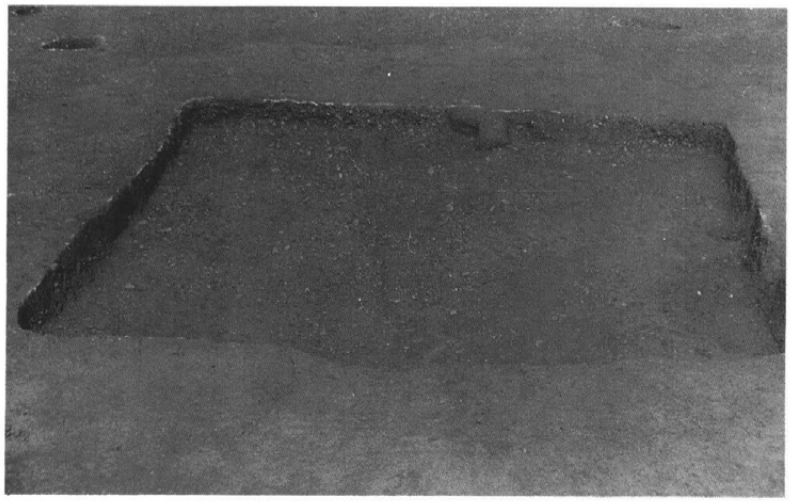
第１号住居址
カマド



第1号住居址
17　出土状況

第1号住居址
10・13・15・16
出土状況

第1号住居址
78　出土状況



第 2 号住居址

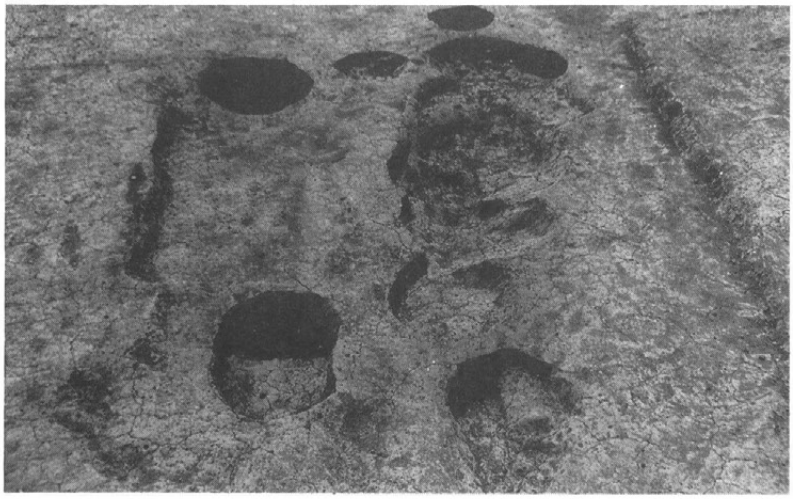
第 3 号住居址

第 3 号住居址
47　出土状況

第３号住居址
38　出土状況

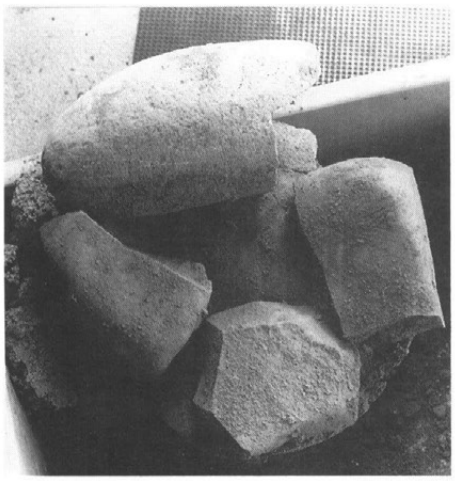
第３号住居址
48　出土状況

土壙
21・22・32
ピット　16・17

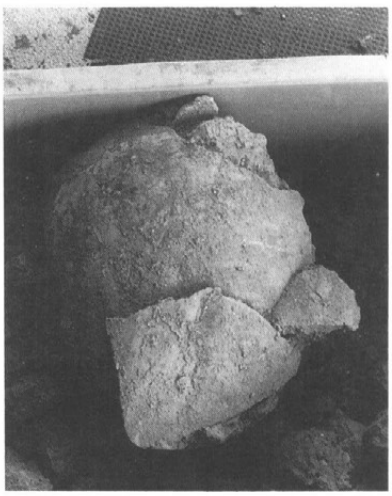


土壙

土器棺墓



土器棺 1
内部状態

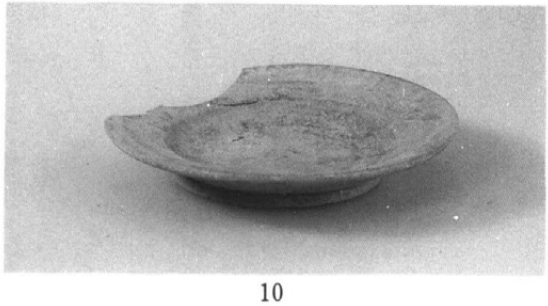


7

3

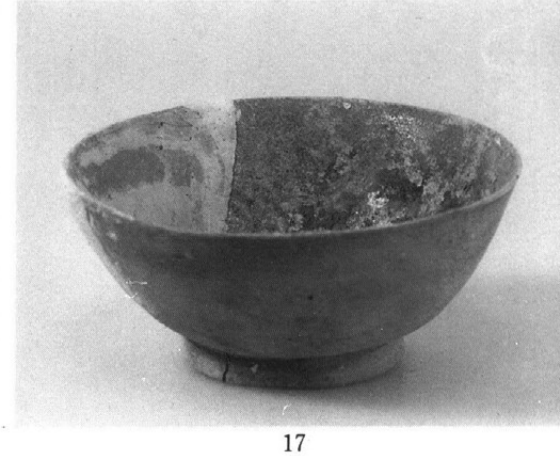
13

9



10

16



17

15

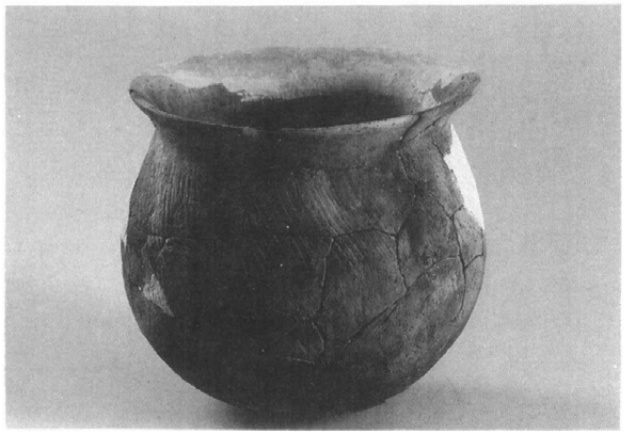
23

29

31

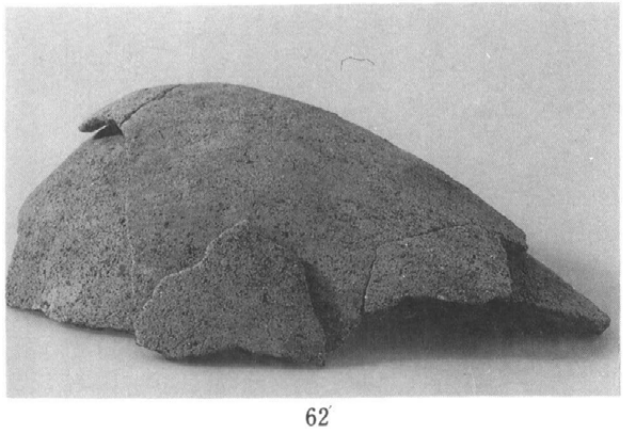
38

47



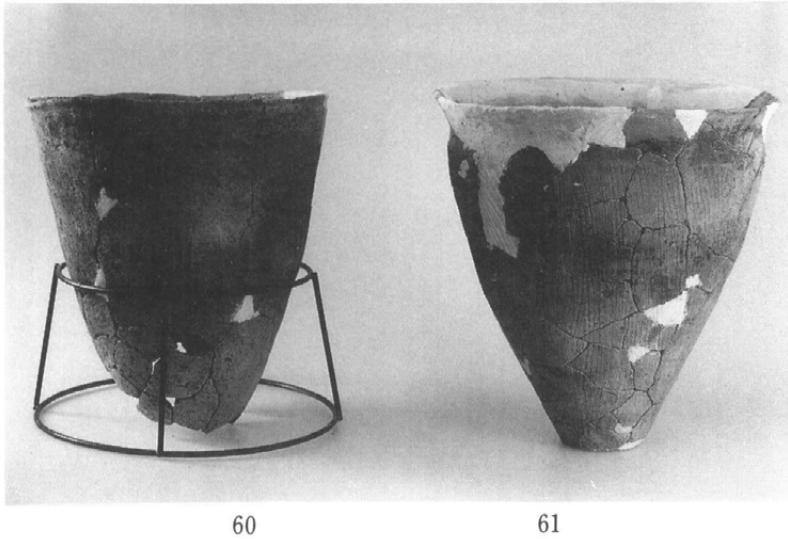
48

78



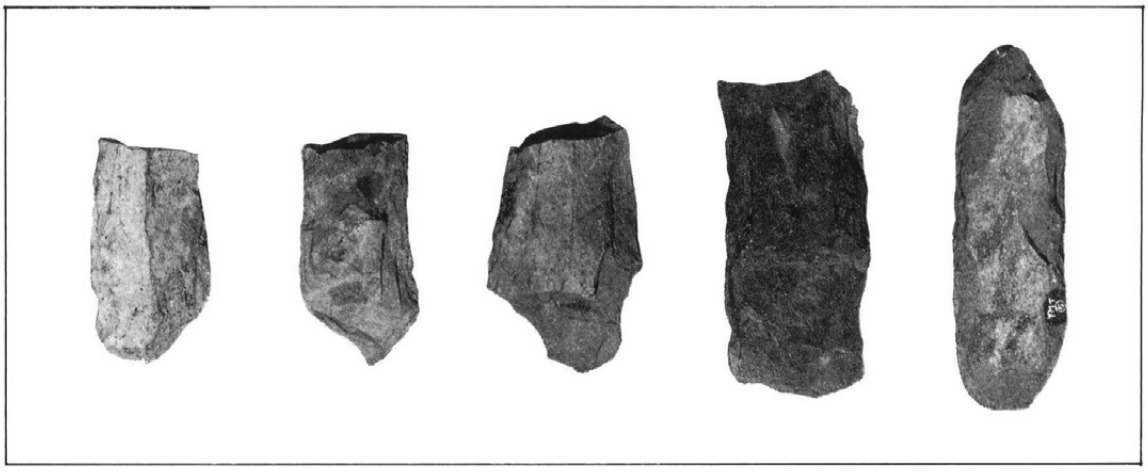
62

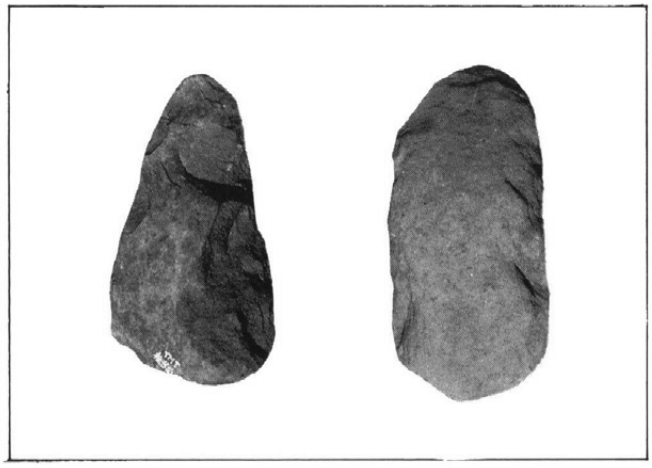
79



60 61

80



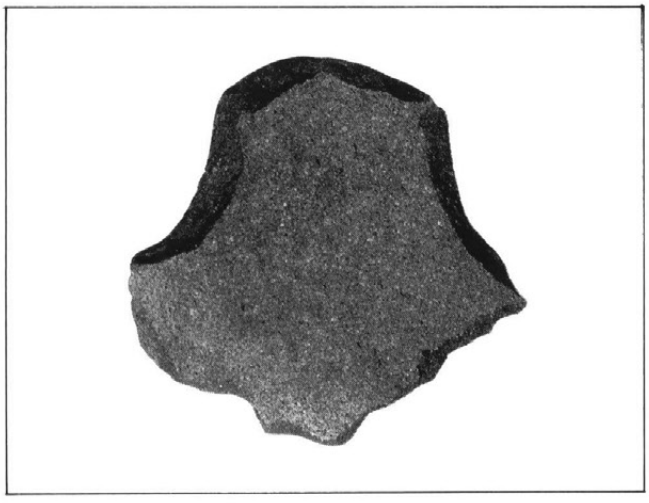


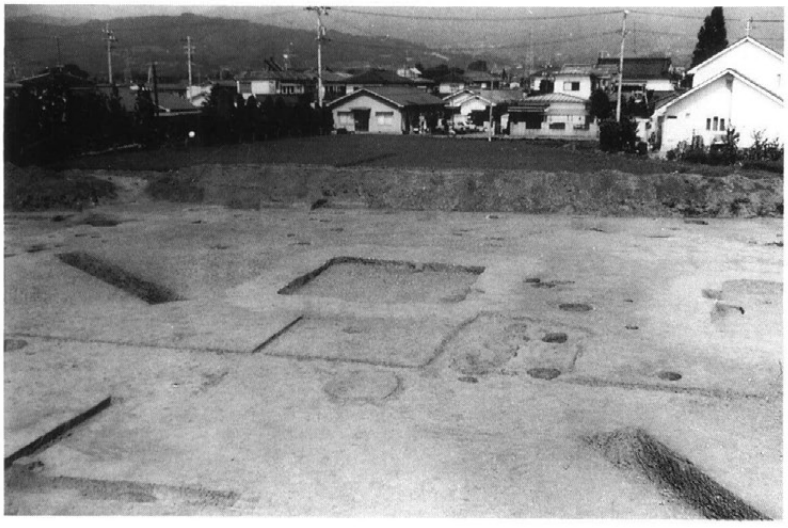
実測図No.

上段：9・8・10・16・13

中段：12・15

下段：20・21





調査地区
全景

作業風景

調査参加者

松本市文化財調査報告No.51

松本市高畑遺跡

昭和62年3月20日　印刷
昭和62年3月31日　発行

発行　松本市教育委員会
印刷　株式会社　綜合印刷所
写植　有賀写植　ANPC

柳本市高炉道路